

山野里宿跡

上郡町

山野里宿跡

—(主)姫路上郡線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



兵庫県文化財調査報告書
第405冊

兵庫県教育委員会

22701-032A4

2011年(平成23年)3月

兵庫県教育委員会

上郡町

やま の さと しゅく
山野里宿遺跡

- (主)姫路上郡線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2011年（平成23年）3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、赤穂郡上郡町山野里四ツ日に所在する山野里宿遺跡の発掘調査報告書である。調査は「山野里四ッ日遺跡」として実施したが、その後、遺跡名を変更し、「山野里宿遺跡」として報告するものである。
2. 発掘調査は（主）姫路上郡線・道路改良事業に先立つもので、兵庫県西播磨県民局上郡土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。発掘調査は、平成16年度に実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館） 山田清朝が担当した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社 サンコムに委託して行った。
5. 整理作業は、平成21年度から兵庫県立考古博物館および魚住分館にて実施した。
6. 遺物写真的撮影は、兵庫県教育委員会が株式会社 谷口フォトに委託して行った。
7. 調査は、G P S 4台を使用し、三等三角点大岳、四等三角点山野里・平野山の3点を基地点として、3級基準点を設置して行った。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに付けていった。また、各遺構種は以下のように呼称した。

掘立柱建物跡→S B、柱穴→P、土坑→S K、溝→S D、井戸→S E
10. 第4図は、国土地理院発行 1/50000地形図『上郡』を使用した。また、第11図は、国土地理院発行 1/25000地形図『上郡』を使用した。この他、第13図と第16図は、上郡町発行都市計画図を使用した。
- 裏表紙に使用した写真是、体験発掘を行った山野里小学校児童から体験後に送られたものである。
11. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
12. 本書の編集は森本貴子の補助を得て山田が行い、第4章を除いては山田が執筆した。
13. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

小田 賢・島田 拓・荒木幸治・赤松和佳・井上喜久生・亀井明徳・川口宏海・橋田正徳
田中幸夫・藤木 透・藤本史子・松岡千寿・渡辺晃宏・山上雅子・中世土器研究会
姫路市埋蔵文化財センター
- 特に、調査・整理にあたっては、上郡町教育委員会小田 賢・島田 拓氏には、特別な御配慮をいただいた。記して、感謝するしだいである。

目 次

第1章 山野里宿遺跡	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	7
第3節 山野里宿遺跡の調査	11
第2章 調査の経緯	
第1節 調査の起因	13
第2節 分布調査・確認調査	16
第3節 本発掘調査	18
第4節 整理作業	20
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	21
第2節 調査の成果	25
第4章 自然科学分析	
第1節 山野里宿遺跡の鉄滓分析	117
第2節 樹種同定	141
第3節 微細物分析	148
第4節 石材鑑定	157
第5節 骨・貝類同定	158
第5章 出土遺物のまとめ	
第1節 土器	167
第2節 瓦	187
第6章 まとめ	
第1節 遺構	189
第2節 山野里宿遺跡の検討	194
第3節 総括	203
出土土器観察表	204
図版	205

挿図目次

第1図	兵庫県における上郡町の位置	xii	第36図	II - 2区掘立柱建物群	25
第2図	上郡町の位置	1	第37図	S B01の位置	25
第3図	上郡町の地理的位置	1	第38図	S B01	26
第4図	山野里宿遺跡の位置	2	第39図	S B02の位置	27
第5図	千種川水系	3	第40図	S B02	27
第6図	千種川（安室川との合流地点付近）	4	第41図	S B03の位置	28
第7図	安室川（上郡駅南側付近）	4	第42図	S B03	28
第8図	西方から見た山野里	4	第43図	S B03 - P 12断面	29
第9図	遺跡周辺の微地形	5	第44図	S B04の位置	29
第10図	II - 1区における微地形	6	第45図	S B04	30
第11図	主要周辺遺跡	8	第46図	S B05の位置	31
第12図	法雲寺 円心堂	10	第47図	S B05	32
第13図	山野里宿遺跡の調査	11	第48図	S B06の位置	33
第14図	第2次調査	12	第49図	S B06	33
第15図	調査前の調査地	13	第50図	S B07の位置	35
第16図	調査位置と姫路・上郡線（竣工後）	13	第51図	S B07	35
第17図	主要地方道姫路上郡線と調査位置（1）	14	第52図	S B08の位置	36
第18図	工事計画と調査位置図	14	第53図	S B08	36
第19図	主要地方道姫路上郡線と調査位置（2）	15	第54図	S B09の位置	37
第20図	竣工後の調査地（西から）	15	第55図	S B09	37
第21図	確認調査	16	第56図	S B10の位置	38
第22図	確認調査位置図	17	第57図	S B10	38
第23図	地区割図	18	第58図	S B10 - P 1断面	38
第24図	発泡ウレタンによる取上げ	18	第59図	II - 1区掘立柱建物群	39
第25図	体験発掘（1）	19	第60図	S B11の位置	40
第26図	体験発掘（2）	19	第61図	S B11 - P 10断面	40
第27図	調査地と周辺の小字	19	第62図	S B11	40
第28図	編物の実測	20	第63図	S B12の位置	41
第29図	II - 1区北東壁	21	第64図	S B12	42
第30図	基本土層図（I区・II - 2区）	22	第65図	S B13の位置	43
第31図	旧河道の検出作業	22	第66図	S B13	43
第32図	基本土層図（II - 1区）	23	第67図	S B14の位置	44
第33図	遺構の検出（1）	23	第68図	S B14	45
第34図	遺構の検出（2）	23	第69図	S B14 - P 22断面	45
第35図	平面図	24	第70図	S B15の位置	47

第71図	S B 15	47	第109図	II - 2 区 柱穴	71
第72図	S B 15 - P 17断面	48	第110図	II - 1 区 柱穴	76
第73図	S B 16の位置	49	第111図	土坑・溝・井戸	85
第74図	S B 16	49	第112図	S E 01	86
第75図	S B 17の位置	50	第113図	S K 01	87
第76図	S B 17 - P 10断面	50	第114図	S K 02	88
第77図	S B 17	51	第115図	S K 03	89
第78図	S B 18の位置	52	第116図	S K 04	89
第79図	S B 18	52	第117図	S K 05	90
第80図	S B 18 柱穴断面	53	第118図	S K 06の検出	90
第81図	S B 19の位置	55	第119図	S K 06 土器出土位置	91
第82図	S B 19	55	第120図	S K 07	92
第83図	S B 20の位置	56	第121図	S K 08	92
第84図	S B 20	56	第122図	S K 09	93
第85図	S B 20 - P 11断面	57	第123図	S K 10	94
第86図	S B 20 - P 5	57	第124図	S D 01断面	94
第87図	S B 21の位置	58	第125図	S D 02断面	95
第88図	S B 21	58	第126図	旧河道の調査	96
第89図	S B 21 - P 8	59	第127図	旧河道断面	97
第90図	S B 22の位置	59	第128図	旧河道内遺物出土位置(1)	98
第91図	S B 22	60	第129図	旧河道内遺物出土位置(2)	99
第92図	S B 23の位置	61	第130図	鉄滓のT.FeとTiO ₂ 濃度	122
第93図	S B 23	61	第131図	鉄滓のT.Feと造滓成分量	122
第94図	S B 24の位置	62	第132図	外観写真1 (試料No. 1)	123
第95図	S B 24	62	第133図	外観写真2 (試料No. 2)	124
第96図	S B 25の位置	64	第134図	外観写真3 (試料No. 3)	125
第97図	S B 25	64	第135図	外観写真4 (試料No. 4)	126
第98図	S B 26の位置	65	第136図	外観写真5 (試料No. 5)	127
第99図	S B 26	65	第137図	試料切斷位置写真1	128
第100図	S B 27の位置	66	第138図	試料切斷位置写真2	129
第101図	S B 27	67	第139図	試料切斷位置写真3	130
第102図	S B 28の位置	67	第140図	顕微鏡組織1 - 1 (試料No. 1)	131
第103図	S B 28	68	第141図	顕微鏡組織1 - 2 (試料No. 1)	132
第104図	S B 29の位置	68	第142図	顕微鏡組織2 - 1 (試料No. 2)	133
第105図	S B 29	69	第143図	顕微鏡組織2 - 2 (試料No. 2)	134
第106図	S B 30の位置	70	第144図	顕微鏡組織3 - 1 (試料No. 3)	135
第107図	S B 30	70	第145図	顕微鏡組織3 - 2 (試料No. 3)	136
第108図	炉壁	71	第146図	顕微鏡組織4 - 1 (試料No. 4)	137

第147図	顕微鏡組織4-2 (試料No.4)	138
第148図	顕微鏡組織5-1 (試料No.5)	139
第149図	顕微鏡組織5-2 (試料No.5)	140
第150図	木材(1)	145
第151図	木材(2)	146
第152図	木材(3)	147
第153図	大型植物遺体	156
第154図	石材	157
第155図	ニホンジカの骨格 (大谷・大秦司. 1994を改変)	
	158
第156図	出土骨(1)	164
第157図	出土骨(2)	165
第158図	出土骨(3)	166
第159図	出土備前焼	167
第160図	備前焼(壺・甌)	168
第161図	備前焼(擂鉢)	169
第162図	椀と皿の法量分布	171
第163図	土師器皿Aの法量分布	173
第164図	皿Abの法量分布	173
第165図	土師器 椭・皿の分類	174
第166図	瓦質土器の分類	177
第167図	輸入陶磁器の分類	179
第168図	軒丸瓦の復元	187
第169図	掘立柱建物群	190
第170図	前半期の掘立柱建物群	192
第171図	後半期の掘立柱建物群	193
第172図	山野里地内小字の復元	197
第173図	地籍図「山野里字四つ日」と調査位置	198
第174図	山野里字宿 地籍図	198
第175図	現在の旧山陽道(宿内)	199
第176図	関連地の位置	200

表 目 次

第1表	主要周辺遺跡	9
第2表	S B01 建物・柱穴規模一覧	26
第3表	S B02 建物・柱穴規模一覧	27
第4表	S B03 建物規模一覧	28
第5表	S B03 柱穴規模一覧	29
第6表	S B04 建物・柱穴規模一覧	30
第7表	S B05 建物・柱穴規模一覧	32
第8表	S B06 建物・柱穴規模一覧	34
第9表	S B07 建物・柱穴規模一覧	35
第10表	S B08 建物・柱穴規模一覧	36
第11表	S B09 建物・柱穴規模一覧	37
第12表	S B10 建物・柱穴規模一覧	38
第13表	S B11 建物・柱穴規模一覧	41
第14表	S B12 建物・柱穴規模一覧	42
第15表	S B13 建物・柱穴規模一覧	44
第16表	S B14 建物・柱穴規模一覧	46
第17表	S B15 建物・柱穴規模一覧	48
第18表	S B16 建物・柱穴規模一覧	50
第19表	S B17 建物・柱穴規模一覧	51
第20表	S B18 建物・柱穴規模一覧	54
第21表	S B19 建物・柱穴規模一覧	55
第22表	S B20 建物・柱穴規模一覧	57
第23表	S B21 建物・柱穴規模一覧	59
第24表	S B22 建物・柱穴規模一覧	60
第25表	S B23 建物・柱穴規模一覧	62
第26表	S B24 建物・柱穴規模一覧	63
第27表	S B25 建物・柱穴規模一覧	65
第28表	S B26 建物・柱穴規模一覧	66
第29表	S B27 建物・柱穴規模一覧	66
第30表	S B28 建物・柱穴規模一覧	68
第31表	S B29 建物・柱穴規模一覧	69
第32表	S B30 柱穴規模一覧	70
第33表	旧河道出土土鍤一覧	107
第34表	旧河道出土銅錢一覧	114

第35表 試料一覧	120	第42表 メロン類種子の計測結果	150
第36表 鉄滓の顯微鏡鉱物組織とその観察状況	120	第43表 検出動物分類群一覧	158
		第44表 骨貝同定結果	159
第37表 調査試料と調査項目	121	第45表 種類別部位別数量表	160
第38表 鉄滓の化学成分分析結果(%)	121	第46表 土師器挽数量表	172
第39表 鉄滓の化学成分分析結果(つづき)(%)	121	第47表 土師器皿数量表	175
		第48表 捶立柱建物跡一覧	189
第40表 樹種同定結果	142	第49表 「山野里」関連史料一覧	194
第41表 種実分析結果	149	第50表 赤松氏の動向	199

図版目次

図版1	P 19出土土器(74・77)		
S B01出土土器(1)	S B03出土土器(2)	P 21出土土器(76)	P 22出土土器(78)
S B04出土土器(3~6)	P 23出土土器(79)	P 24出土土器(80)	
S B06出土土器(8~10)	P 25出土土器(81・82)	P 26出土土器(83)	
S B07出土土器(11~14)	S B08出土土器(15)	P 28出土土器(84)	P 27出土土器(85)
S B09出土土器(16)	S B12出土土器(17~19)	図版3	
S B13出土土器(20・21)	S B14出土土器(22)	P 29出土土器(86)	P 32出土土器(87)
S B15出土土器(23~35)	S B17出土土器(36)	P 33出土土器(88)	P 35出土土器(89)
S B18出土土器(37~41)		P 30出土土器(90)	P 36出土土器(91)
図版2	P 37出土土器(93)	P 38出土土器(92)	
S B18出土石製品(42)	S B19出土土器(43)	P 39出土土器(94)	
S B21出土土器(44)	S B23出土土器(45)	P 40出土土器(95・96)	P 42出土土器(97)
S B24出土土器(46~49)		P 43出土土器(98)	P 44出土土器(99)
S B25出土土器(50)		P 45出土土器(100)	P 50出土土器(101)
S B29出土土器(51・52)		P 49出土土器(102)	P 47出土土器(103)
P01出土土器(53)	P04出土土製品(54)	P 48出土土器(104)	P 51出土土器(105)
P02出土土器(55)	P05出土土器(56)	S B24出土土器(106)	P 52出土土器(107)
P06出土土器(57)	P07出土土器(58・59)	P 53出土土器(108)	P 54出土土器(109)
P08出土土器(60~62)	P10出土土器(61)	P 55出土土器(110)	P 56出土土器(111)
P09出土土器(63)	P12出土土器(65)	P 57出土土器(112・113)	P 58出土土器(114)
P13出土土器(66)	P14出土土器(67・69)	P 59出土土器(115)	P 60出土土器(116・117)
P15出土土器(68)	P16出土土器(70)	P 61出土土器(118)	P 63出土土器(120)
P17出土土器(71・72)	P18出土土器(73・75)	S B30出土土器(121)	

图版 4	旧河道出土土器 (589~592)
P 64出土土器 (122~126)	包含层出土土器 (594~618)
S E01出土土器 (127~128)	图版20
S K01出土土器 (129) S K02出土土器 (130)	包含层出土土器 (619~626)
S K03出土土器 (131) S K05出土土器 (132)	基叠层出土土器 (628~630)
S K06出土土器 (133~147)	旧河道出土石制品 (631~636)
图版 5	旧河道出土石制品 (637)
S K06出土土器 (148)	图版21
S K07出土土器 (149~153)	旧河道出土瓦 (K 1)
S K08出土土器 (154)	图版22
S D02出土土器 (155~173)	旧河道出土瓦 (K 2)
图版 6	图版23
旧河道出土土器 (174~225)	旧河道出土瓦 (K 3)
图版 7	图版24
旧河道出土土器 (226~292)	旧河道出土瓦 (K 4)
图版 8	图版25
旧河道出土土器 (293~382)	旧河道出土瓦 (K 5)
图版 9	图版26
旧河道出土土器 (383~460)	旧河道出土瓦 (K 6~K 8)
图版10	图版27
旧河道出土土器 (461~477)	旧河道出土瓦 (K 9)
图版11	图版28
旧河道出土土器 (478~492)	旧河道出土瓦 (K 10)
图版12	图版29
旧河道出土土器 (493~502)	旧河道出土瓦 (K 11)
图版13	图版30
旧河道出土土器 (503~520)	旧河道出土瓦 (K 12~K 13)
图版14	图版31
旧河道出土土器 (521~528)	旧河道出土瓦 (K 14~K 16)
图版15	图版32
旧河道出土土器 (529~533)	旧河道出土木制品 (W 1~W 10)
图版16	图版33
旧河道出土土器 (534~544)	旧河道出土木制品 (W 11)
图版17	图版34
旧河道出土土器 (545~554)	旧河道出土铁制品 (M 1~M 3·M 7·M 12·M 15)
图版18	包含层出土铁制品 (M 4·M 8·M 10)
旧河道出土土器 (555~588)	S D02出土铁制品 (M 5·M 6)
图版19	S B01出土铁制品 (M 9)

P34出土鉄製品 (M11)	P46出土鉄製品 (M13)	図版35
S K02出土鉄製品 (M14)		S B15出土銅錢 (M20)
P41出土鉄製品 (M16)	P11出土鉄製品 (M17)	旧河道出土銅錢 (M21~M36)
P31出土鉄製品 (M18)	P20出土鉄製品 (M19)	旧河道出土鐵滓 (M37~M40)

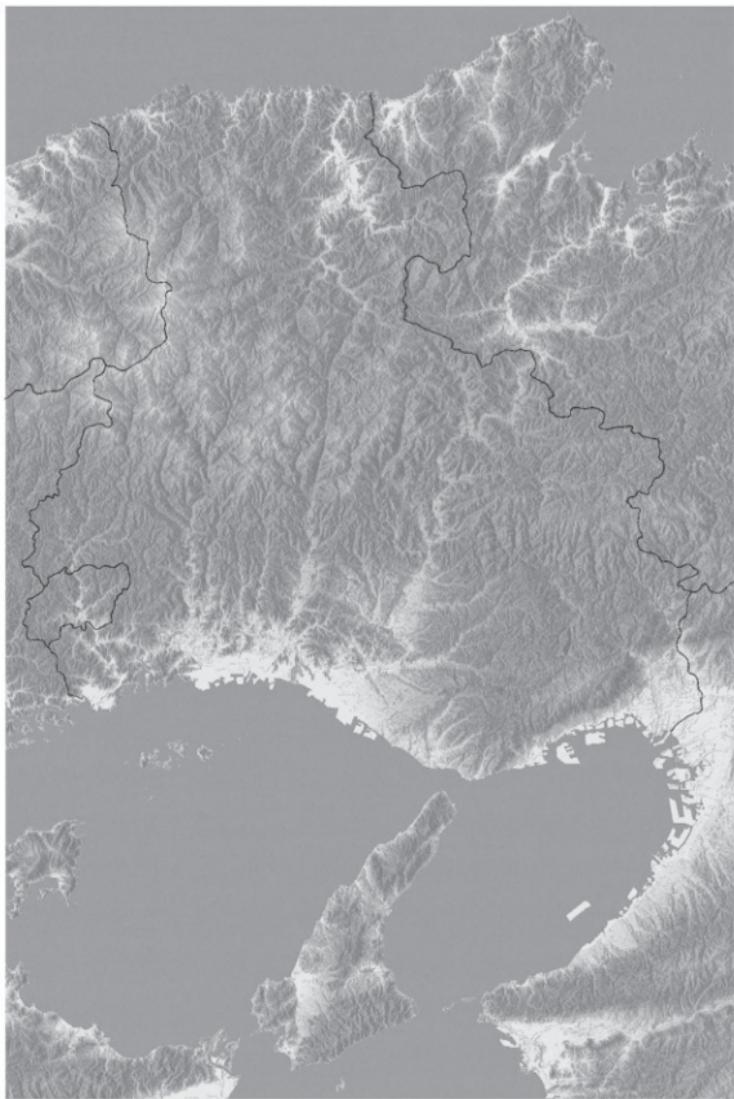
写 真 図 版 目 次

カラー図版1 遺跡	カラー図版10 遺物
遺跡遠景 東上空から	出土土師器 (楕・皿)
遺跡近景 西上空から	カラー図版11
カラー図版2 遺跡	出土土師器楕 (内面)
遺跡近景 北西上空から	カラー図版12
遺跡近景 南上空から	出土土師器楕 (底部)
カラー図版3 遺構	カラー図版13
調査地近景 西上空から	出土土師器皿 (内面)
調査地近景 東上空から	カラー図版14
カラー図版4 遺構	出土土師器皿 (底部)
調査地近景 南上空から	カラー図版15
II - 1区全景 南東上空から	出土瀬戸・美濃焼
カラー図版5 遺構	カラー図版16
I区・II - 2区全景 北西上空から	出土唐津焼・志野焼
I区・II - 2区全景 西上空から	カラー図版17
カラー図版6 遺構	中国製灰釉陶器 (572)
II - 1区近景 南東上空から	カラー図版18
II - 1区近景 西上空から	出土青磁碗 (587) 輸入陶器
カラー図版7 遺構	カラー図版19
旧河道断面	柱穴・土坑出土青磁
旧河道内 編物出土状況	カラー図版20
旧河道内 漆楕 (W 1) 出土状況	柱穴・溝・包含層出土青磁
カラー図版8 遺物	カラー図版21
山野里宿遺跡出土土器・瓦	旧河道出土青磁
カラー図版9 遺物	カラー図版22
山野里宿遺跡出土土器	旧河道出土青磁
山野里宿遺跡出土瓦質土器 (風炉・火鉢)	カラー図版23

柱穴・溝・包含層出土白磁	カラー図版27
カラー図版24	出土木簡
旧河道出土白磁	カラー図版28
カラー図版25	出土漆椀（W1）出土編物（W11）
出土備前焼	カラー図版29
カラー図版26	出土椀形鉄滓
出土瓦	
モノクロ図版 1 遺構	モノクロ図版10 遺構
I 区全景 南から	旧河道内杭列 北東から
II - I 区全景 東から	旧河道内石組み遺構 南西から
モノクロ図版 2 遺構	旧河道内石組み遺構 南東から
II - II 区全景 西から	モノクロ図版11 遺構
モノクロ図版 3 遺構	旧河道断面 東から
II - I 区 館跡	旧河道 土師器出土状況 南から
モノクロ図版 4 遺構	旧河道 土師器出土状況 西から
II - I 区全景 南西から	旧河道 土師器出土状況 北から
モノクロ図版 5 遺構	モノクロ図版12 遺物
掘立柱建物群Ⅰ 北から	S B05出土土器 (7)
掘立柱建物群Ⅱ 南東から	S B07出土土器 (13)
モノクロ図版 6 遺構	S B12出土土器 (19)
S B15~P12土器出土状況 南から	S B15出土土器 (23)
S B18~P18底部 東から	S B18出土土器 (41)
S B18~P19底部 西から	モノクロ図版13 遺物
S B18~P21底部 北から	S B15出土土器 (26~28・30)
S B21~P11底部 東から	モノクロ図版14 遺物
S B21~P 8 底部 西から	S B15出土土器 (29・31~35)
モノクロ図版 7 遺構	モノクロ図版15 遺物
S E01全景 北から	S B18出土石製品 (42)
S K02全景 南東から	S B29出土土器 (51)
モノクロ図版 8 遺構	P04出土土製品 (54)
S K05全景 南から	P05出土土器 (56)
S K05全景 西から	モノクロ図版16 遺物
モノクロ図版 9 遺構	P10出土土器 (61)
S K06全景 北から	P17出土土器 (71)
S K06全景 北東から	P27出土土器 (85)
	P38出土土器 (92)

- P47出土土器（103）
モノクロ図版17 遺物
P62出土土器（119）
P64出土土器（122・123）
SK06出土土器（139・140・143）
SK07出土土器（150）
モノクロ図版18 遺物
SK05出土土器（132）
SK06出土土器（133・136・138・144・146）
SK07出土土器（149・151）
モノクロ図版19 遺物
SK07出土土器（152）
SD02出土土器（155～157・165・169）
旧河道出土土器（175・176・182）
モノクロ図版20 遺物
旧河道出土土器（186・189・196・209・221）
モノクロ図版21 遺物
旧河道出土土器（216・219・222・223）
モノクロ図版22 遺物
旧河道出土土器（224・225・229・241）
モノクロ図版23 遺物
旧河道出土土器（238・242・243・245・246）
モノクロ図版24 遺物
旧河道出土土器（248・251・253・255）
モノクロ図版25 遺物
旧河道出土土器（254・258・259・269）
モノクロ図版26 遺物
旧河道出土土器（265・267・271・314）
モノクロ図版27 遺物
旧河道出土土器（278・292・294・299）
モノクロ図版28 遺物
旧河道出土土器（323・328・331・334）
モノクロ図版29 遺物
旧河道出土土器（329・361・362・375・378）
モノクロ図版30 遺物
旧河道出土土器（379・381・382・385）
モノクロ図版31 遺物
旧河道出土土器（405・415・423・426～428）
- モノクロ図版32 遺物
旧河道出土土器（429～433）
モノクロ図版33 遺物
旧河道出土土器（434・435・437・438）
モノクロ図版34 遺物
旧河道出土土器（439・443・445・447）
モノクロ図版35 遺物
旧河道出土土器（448～450・453）
モノクロ図版36 遺物
旧河道出土土器（452・454・458・460・462・470・491）
モノクロ図版37 遺物
旧河道出土土器（492・495・498～500・502・503）
モノクロ図版38 遺物
旧河道出土土器（504～507）
モノクロ図版39 遺物
旧河道出土土器（508・510・511・513・517・518）
モノクロ図版40 遺物
旧河道出土土器（519・521・523・528・534・539）
モノクロ図版41 遺物
旧河道出土土器（536・538・542・549）
モノクロ図版42 遺物
旧河道出土土器（545・546・551・553）
モノクロ図版43 遺物
旧河道出土土器（550・554・558・561）
モノクロ図版44 遺物
旧河道出土土器（559・565・569）
包含層出土土器（594・595）
モノクロ図版45 遺物
包含層出土土器（596～598・600・602・604）
モノクロ図版46 遺物
包含層出土土器（605・610）
基盤層出土土器（630）
旧河道出土石製品（637）
モノクロ図版47 遺物
旧河道出土土製品（631～636）
モノクロ図版48 遺物
旧河道出土瓦（K1）

モノクロ図版49 遺物	モノクロ図版60 遺物
旧河道出土瓦（K 2）	旧河道出土木製品（W 9）
モノクロ図版50 遺物	モノクロ図版61 遺物
旧河道出土瓦（K 3）	旧河道出土鉄製品（M 1～M 3・M 7・M12・M15）
モノクロ図版51 遺物	包含層出土鉄製品（M 4・M 8・M10）
旧河道出土瓦（K 4）	SD02出土鉄製品（M 5・M 6）
モノクロ図版52 遺物	SB01出土鉄製品（M 9）
旧河道出土瓦（K 5）	P34出土鉄製品（M11）
モノクロ図版53 遺物	P46出土鉄製品（M13）
旧河道出土瓦（K 6・K 7）	SK02出土鉄製品（M14）
モノクロ図版54 遺物	P41出土鉄製品（M16）
旧河道出土瓦（K 8・K 9）	P11出土鉄製品（M17）
モノクロ図版55 遺物	P31出土鉄製品（M18）
旧河道出土瓦（K 10・K 11）	P20出土鉄製品（M19）
モノクロ図版56 遺物	モノクロ図版62 遺物
旧河道出土瓦（K 12～K 14）	SB15出土銅錢（M20）
モノクロ図版57 遺物	旧河道出土銅錢（M21～M36）
旧河道出土瓦（K 15・K 16）	モノクロ図版63 遺物
モノクロ図版58 遺物	旧河道出土鉄滓（M37・M38）
旧河道出土木製品（W 3～W 7）	モノクロ図版64 遺物
モノクロ図版59 遺物	旧河道出土鉄滓（M39・M40）
旧河道出土木製品（W 8・W10）	



第1図 兵庫県における上郡町の位置

第1章 山野里宿遺跡

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

上郡町

山野里宿遺跡は赤穂郡上郡町山野里に所在する。山野里宿遺跡の所在する上郡町は、兵庫県の南西部に位置する町で（第1図）、東側を相生市、北東側をたつの市、北側を佐用町、南側を赤穂市と境をなしている。そして、西側は岡山県和気町、南西側は岡山県備前市と境をなしている（第2図）。

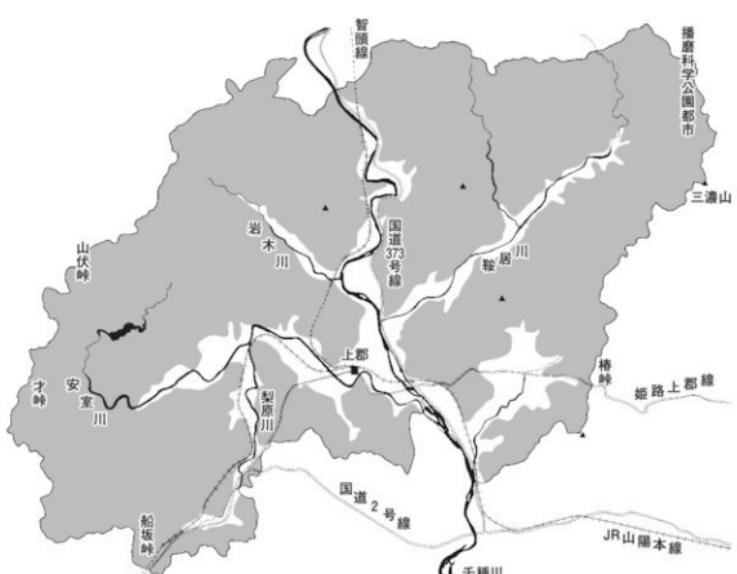
交通の要衝

人口は1,700人（平成21年12月現在：上郡町ホームページによる）、市域の面積は150.28km²（東西14.3km・南北10.5km）である。

上郡町は、古代から中世にかけて畿内（平安京）と九州（大宰府）を東西に結ぶ山陽道のルート上に位置し（第11図）、古代においては駅家（高田駅家・野磨駅家）、中世以降においては宿が置かれていた。また、上郡町の中心を千種川が南北に流れ、瀬戸内と播磨内陸部を結ぶ河川交通のルート上に位置している。



第2図 上郡町の位置



第3図 上郡町の地理的位置

このように、上郡町は、畿内と九州を東西に結ぶ山陽道と、瀬戸内と播磨内陆部を南北に結ぶ、交通の要衝としての機能をはたしてきた。現在においても、JR山陽本線が上郡町を通り、上郡町の南側に隣接する赤穂市北部では西日本を東西に結ぶ国道2号線が東西にのびている（第3図）。

また、赤穂市有原において、国道2号線から国道373号線が北上し、佐用町を通り鳥取県へ通じ、日本海側と瀬戸内を結ぶ機能を果たしている。同じように、鉄道交通として智頭急行線が同様の機能をはたしている。また、旧山陽道に沿うように、県道姫路上郡線が東西にのび、上郡町のほぼ中心部を通っている。

山野里宿遺跡

このような、東西と南北を結ぶ機能を現在でも果たしている一つが、JR上郡駅である（第4図）。そして、このJR上郡駅の南西側に山野里宿遺跡が所在する。具体的には、県道姫路上郡線=旧の山陽道のルート上にあたり、JR山陽本線上郡駅の南西約350mに位置する。また、山陽道と千種川が交差する地点の西側にあたる。

2. 地形的環境

上郡中央低地

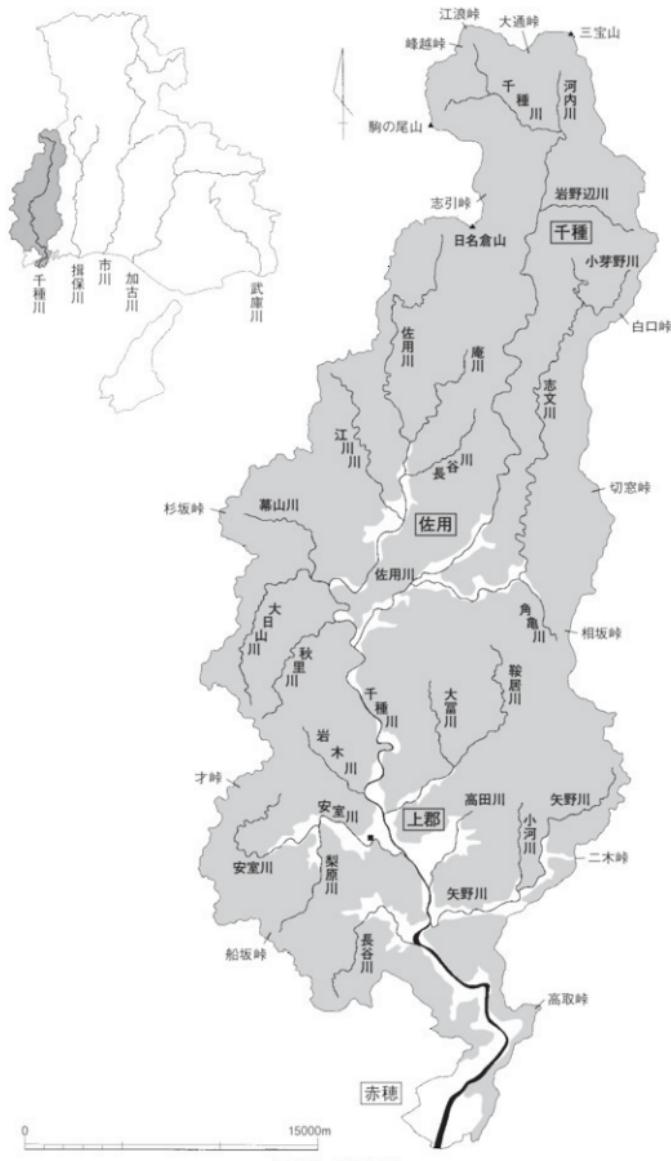
山野里宿遺跡が位置する場所は、千種川を中心に形成された上郡中央低地の中央部付近に位置する。千種川は、その流域の大半は狭小な谷地形からなり、大きく蛇行を繰返しながら瀬戸内海に注いでいる。しかし、中流域の上郡町中央部では比較的広い低地が形成されている。これが上郡中央低地で、上郡中央低地の中心をなす千種川に向って、北東側から鞍居川が、北西側から岩木川が、西側から安室川が流れ込んでいる（第5図）。

千種川

上郡中央低地の中心をなす千種川は、兵庫県・岡山県・鳥取県の境に位置する江浪峰



第4図 山野里宿遺跡の位置



第5図 千種川水系

(標高1098m)付近を源とする二級河川で、佐用町三日月で志文川と、佐用町久崎で佐用川と、赤穂市有年で矢野川等を合わせ、赤穂市尾崎・中広で播磨灘に注いでいる(第6図)。全長67.6kmを測り、その流域面積は730kmに及ぶ。

安室川

上部中央低地を形成する小河川の一つである安室川(第7図)は、才岬の東側を源とする二級河川で、途中梨原川を合せ、大きく蛇行しながら千種川に合流している。全長は約12kmに及ぶ。そして千種川との合流地点から約1.5km遡った地点の左岸に、山野里宿遺跡が所在する(第8図)。安室川が南側へ大きく蛇行している箇所の西側にある。

周辺微地形

次に、上記の安室川が大きく蛇行した箇所を中心とした山野里宿遺跡周辺地域の微地形を検討してみたい。対象としたのは千種川右岸の安室川より北側の低地である。

そこで、当該地域の微地形を復元したのが第9図である。上郡町発行都市計画図(1:2500)・「上郡町地形・地質図」「上郡町史 第三巻史料編 I 付図」(上郡町発行 1999)をもとに、国土地理院発行空中写真判読および現地踏査の結果を合わせ、復元したものである。

これによると、多くは、千種川の影響下にある低地もしくは氾濫原からなる。このなかに、いくつかの微高地を復元することが可能である。ただし、微高地自体は小規模で、その数もわずかである。これらの微高地の大半が主軸方向を南北にとり、千種川によって形成されたものと考えられる。

このなかで、唯一東西方向に主軸をとる微高地が認められる。その方向性から安室川によって形成された自然堤防からなる微高地である。その規模は、東西で500m、南北で70mほどの規模である。この微高地は、山野里宿遺跡の範囲とほぼ一致するものである。この微高地の東端部が、今回報告する調査地にあたる。調査地は、微高地の東縁辺部にあたるものと考えられる。

また、大規模な旧河道が南北に流れ、その南端は山野里宿遺跡の東側に至り、安室川に合流している。ある時期の千種川の本流であった可能性も考えられる。

調査地微地形

調査地が微高地の東端部にあたることが明らかとなった。さらに、II-1区の調査成果



第6図 千種川(安室川との合流地点付近)



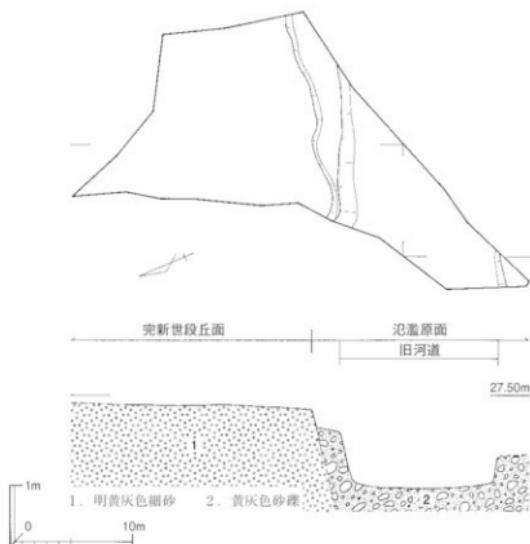
第7図 安室川(上郡駅南側付近)



第8図 西方から見た山野里



第9図 遺跡周辺の微地形



第10図 II-1区における微地形

から、より詳細な微地形を明らかにすることができた（第10図）。これによると、II-1区中央部、道構を検出した一帯の南側、旧河道北側肩部付近で、旧河道と平行する約20cmの段が認められた。断ち割り調査による土層観察の結果から、この段が段丘崖の一部であることが明らかとなった。つまり、この段より北側一帯が微高地の本体＝完新世段丘Ⅱ面に相当し、より南側はその氾濫原面と考えられる。そして、旧河道と段丘崖の間の平坦面は、氾濫原が埋没する過程で形成された面と考えられる。

そして、氾濫原面には、幾筋かの旧河道が埋没しているものと考えられ、その一つが今回検出した旧河道と考えられる。

また、完新世段丘Ⅱ面を形成する層からは、古墳時代後期と奈良時代の土器が少ながらず出土している（図版20）。したがって、当該期以降に当段丘が形成されたものと考えられる。

〔参考文献〕

上郡町史編纂専門委員会編『上郡町史 第一巻 本文編Ⅰ』上郡町 2008

第2節 歴史的環境

はじめに 山野里宿遺跡の周辺には、多くの遺跡が周知されている（第11図）。ここでは、千種川右岸の上郡中央低地を中心みていく。

1. 旧石器時代～縄文時代

当地において、旧石器時代の遺跡は周知されていない。

縄文時代の遺跡としては、竹万山田遺跡（11）が周知されている。

竹万山田遺跡 平成14年度に、（主）赤穂佐伯線道路改修事業に伴い発掘調査が行われている⁽¹⁾。安室川が千種川に合流する地点に面した小扇状地上に立地する遺跡である。縄文時代後期の流路が検出されている。土器が多量に出土している。

2. 弥生時代

竹万宮ノ前遺跡（9）・竹万山田遺跡（11）・井上遺跡（5）・船坂土井ノ内遺跡（18）・船坂土井ノ西遺跡（16）・船坂五反田遺跡（22）・船坂神子ヶ坪遺跡（20）・船坂井谷下タ遺跡（19）・船坂土井東遺跡（17）・船坂森ノ木遺跡（15）・落地飯坂遺跡（28）・別名遺跡（27）・羽山遺跡（4）・高嶺遺跡（25）が周知されている。

竹万宮ノ前遺跡 平成13年度に、（主）郷路上郡線住宅地開拓整備促進事業に伴い発掘調査が行われている⁽²⁾。調査の結果、弥生時代後期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などが検出されている。後期のなかでも、土坑・柱穴は後期前葉に、堅穴住居跡は庄内併行期に位置付けられるものである。

竹万山田遺跡 先述した調査で、中期の土器が出土している。

井上遺跡 集落遺跡で、壺棺が調査で明らかとなっている。

船坂土井ノ内遺跡 圓場整備に伴う調査で、サギとみられる鳥を描いた絵画土器が出土している。

船坂土井ノ西遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期および中期末～後期初頭の土器、太形蛤刃石斧・石皿が出土している⁽³⁾。

船坂五反田遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期の土器やサスカイト片が出土している⁽³⁾。

船坂神子ヶ坪遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期の土器が出土している⁽³⁾。

船坂井谷下タ遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期の土器が出土している⁽³⁾。

船坂土井東遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期の土器が出土している⁽³⁾。

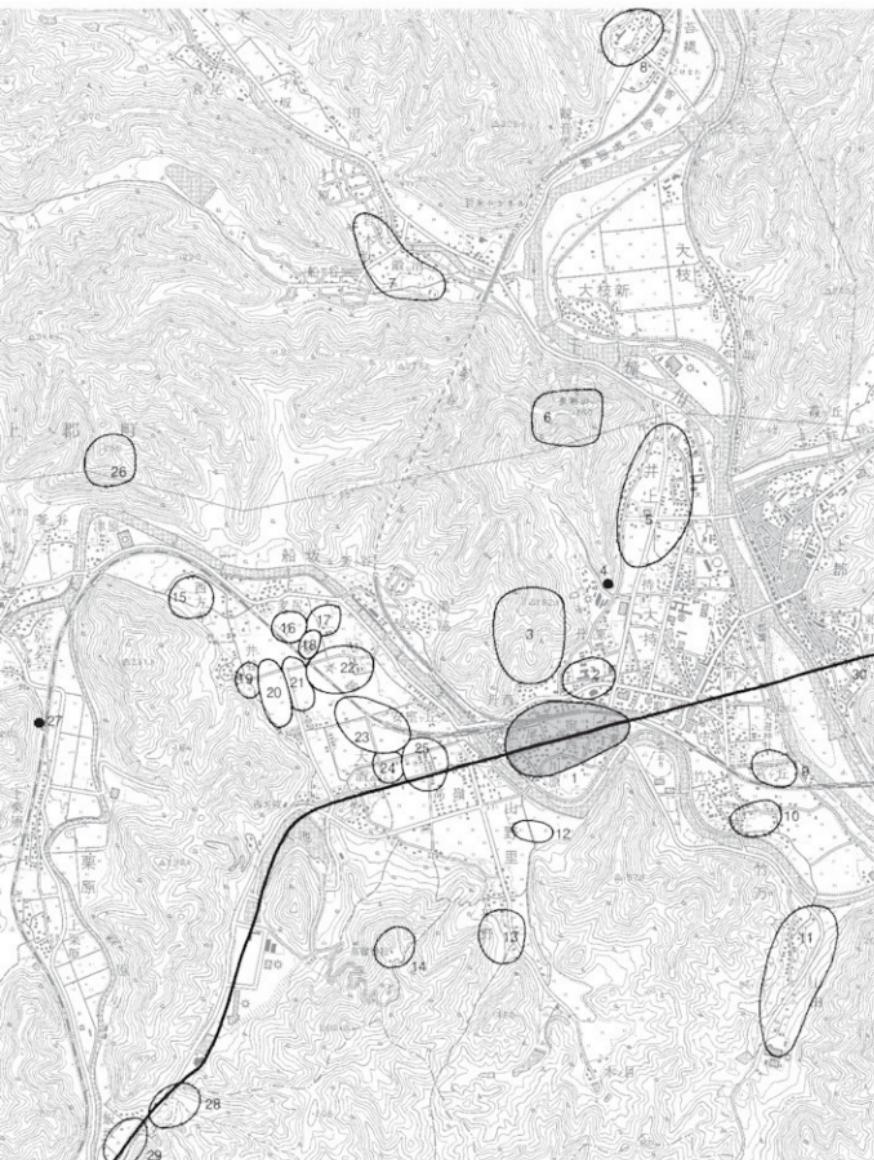
船坂森ノ木遺跡 圓場整備に伴う調査で、中期の土器が出土している⁽³⁾。

落地飯坂遺跡 八反坪地区で打製石器が出土している。

別名遺跡 土取り作業の際、中細銅劍が3点出土している⁽³⁾。

羽山遺跡 弥生時代後期の壺棺群が周知されている⁽³⁾。

高嶺遺跡 団地造成の際、弥生時代後期土器が出土している⁽³⁾。



3. 古墳時代

竹万宮ノ前遺跡（9）・山野里小学校前遺跡（2）が周知されている。

竹万宮ノ前遺跡 先述した調査で、古墳時代後期の堅穴住居跡が検出されている。住居跡内からは、円筒形土器などが出土している。この他、古墳時代中期の韓式系土器や初期須恵器・石製軋錘車など、渡来系集団に関連する遺物が出土している点が注目される。

山野里小学校前遺跡 老人介護施設建設に伴い、上郡町教育委員会により本発掘調査が行われている。調査の結果、当該期の旧河道が検出されている。後期の須恵器が出土している⁽⁴⁾。

4. 奈良時代～平安時代前期

当該期は、赤穂郡に編入されていた。

竹万宮ノ前遺跡（9）・竹万山田遺跡（11）・落地飯坂遺跡（28）・山野里大坪遺跡（12）・古代山陽道（30）が周知されている。

竹万宮ノ前遺跡 上記の調査で、柱穴・溝・土坑が検出されている。古大内式軒丸瓦の出土が注目される⁽⁵⁾。

竹万山田遺跡 先述した調査で、当該期の柱穴等が検出されている。

落地飯坂遺跡 飯坂地区と八反坪地区で調査が行われ、それぞれ大きな成果が得られている。

飯坂地区の調査では、古代山陽道に伴う野磨駅家跡が明らかとなっている⁽⁶⁾。八反坪地区で明らかとなった野磨駅家の建替え後の遺構と考えられている。西廻を囲む瓦葺築地塀・礎石建物・南門・西門などが検出され、駅家の構造を理解する上で良好な資料となっている。

八反坪地区の調査では、官衙風に配置された掘立柱建物群とこれを囲む堀跡が検出されている⁽⁶⁾。飯坂地区で明らかとなった野磨駅家の建て替え前の駅家と考えられている。

山野里大坪遺跡 山野里字大坪に所在する遺跡で、上郡中学校建設に伴い本発掘調査が平成19年度に行われている⁽⁷⁾。調査の結果、平安時代（9世紀～11世紀）の護岸施設を伴う旧河道が明らかとなっている。旧河道内からは、多くの木製祭祀遺物や墨書き土器などが出土しており、これらの遺物内容から、官衙に関連する遺構と考えられている。

古代山陽道 古代・中世においては、たつの市小丸から椿林を越え高田駅家・野磨駅家を通り、船

第1表 主要周辺遺跡

No	遺跡名（兵庫県遺跡番号）	時期	No	遺跡名（兵庫県遺跡番号）	時期
1	山野里宿遺跡（480278）	中世	16	船坂土井ノ西遺跡（480241）	弥生～中世
2	山野里小学校前遺跡（480202）	古墳	17	船坂土井東道路（480239）	弥生～中世
3	コンビラ山遺跡（480203）	中世	18	船坂土井ノ内遺跡（480240）	弥生～中世
4	羽山遺跡（480004）	弥生	19	船坂井谷下夕遺跡（480238）	弥生
5	井上遺跡（480005）	弥生	20	船坂神子ヶ坪遺跡（480237）	弥生・古墳
6	駒山城跡（480175）	中世	21	船坂東ノ門遺跡（480236）	古墳
7	鍛治千軒遺跡（480281）	中世	22	船坂五反田遺跡（480235）	弥生・中世
8	法雲寺遺跡（480193）	中世	23	西東三ノ帰り遺跡（480253）	绳文
9	竹万宮ノ前遺跡（480260）	弥生～中世	24	西田梅ヶ坪遺跡（480258）	绳文
10	竹万京免遺跡（480261）	中世	25	高嶺遺跡（480198）	弥生
11	竹万山田遺跡（480010）	绳文・弥生	26	大型寺山城跡（480183）	中世
12	山野里大坪遺跡（480293）	奈良・平安	27	別名遺跡（480007）	弥生
13	平野遺跡（480197）	古墳・平安	28	落地飯坂遺跡（480171）	奈良・平安
14	天王山城跡（480187）	中世	29	落地八反坪遺跡（480233）	弥生～中世
15	船坂森ノ木遺跡（480250）	弥生～中世	30	山陽道	古代～中世

坂峠を経て備前国へ抜ける山陽道のルートが山野里を東西に走っていた。ただし江戸時代になると、山陽道は赤穂市有年を通所するようになる。この間、1333年には播磨・美作国境の杉坂峠と山ノ里の2箇所に関所が設けられていた。また、同年の史料によると山野里に宿が形成されていた。

5. 平安時代後期～鎌倉時代

竹万宮ノ前遺跡（9）・山野里小学校前遺跡（2）が周知されている。

竹万宮ノ前遺跡 上記の調査で、掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑が検出されている。須恵器・土師器等が出土している。

山野里小学校前遺跡 先述した本発掘調査で、土坑が検出されている。

6. 室町時代

船坂土井ノ内遺跡（18）・法雲寺遺跡（8）が周知されている。

船坂土井ノ内遺跡 圓場整備に伴う調査で、一辺70～80m、幅5mの堀に囲まれた方形区画をなす城館跡が明らかとなっている。濠内からは、下駄や備前焼の鉢・甕・青磁香炉・青磁碗・土師器皿などが出土している。⁽³⁾

法雲寺遺跡 建武四年に赤松円心により創建された法雲寺跡である。現在も法灯が受け継がれている。ただし一部に限られ、当時の寺域からは瓦が採集されている。ここで採集された瓦の一部は、本書で報告する瓦と同様もしくは同型のもので、本遺跡を検討するうえで、欠かすことのできない遺跡である。



第12図 法雲寺 内心堂

〔註〕

(1) 西口圭介「竹万山田遺跡」『平成14年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003

(2) 上田健太郎「竹万宮ノ前遺跡－（主）姫路上郡線住宅地開発事業に伴う発掘調査報告書－」
兵庫県教育委員会 2009

(3) 上郡町史編纂専門委員会編『上郡町史 第三巻 史料編Ⅰ』上郡町 1999

(4) 上郡町教育委員会の御教示による。

(5) 小田 賢「古代山陽道 野磨駅家跡－落地遺跡飯坂地区ほか発掘調査報告書－」上郡町教育委員会 2006

(6) 小田 賢・島田 拓「落地遺跡（八反坪地区）－県営圓場整備事業にともなう発掘調査報告書－」
上郡町教育委員会 2005

(7) 上郡町教育委員会「山野里大坪遺跡発掘調査 現地説明会資料」2007

(8) 兵庫県教育委員会「歴史の道調査報告書 第二集 山陽道（西国街道）」 1992

(9) 上郡町教育委員会「発掘されたかみごおり－平成元年～8年度の発掘調査の成果より－」 1997

〔参考文献〕

上郡町史編纂専門委員会編『上郡町史 第一巻 本文編Ⅰ』上郡町 2008

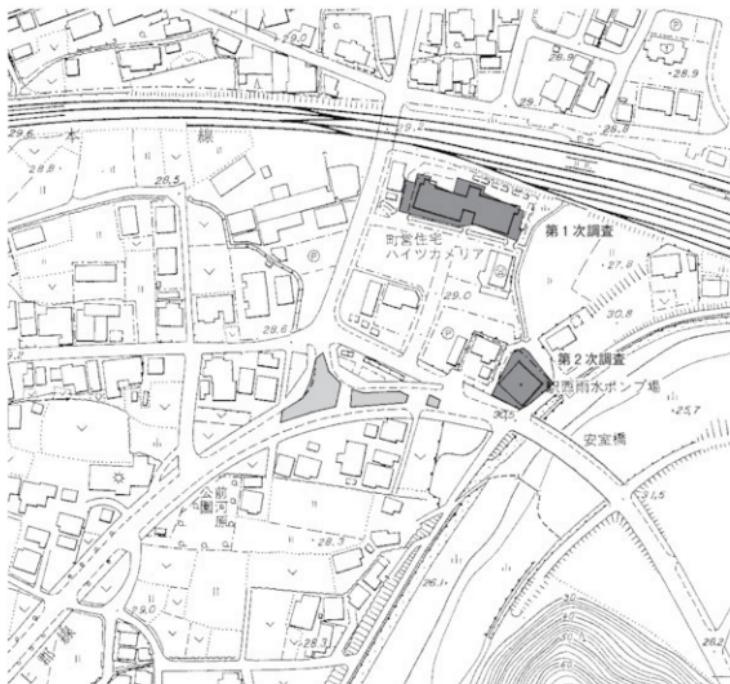
兵庫県教育委員会「兵庫県遺跡地図」2004

第3節 山野里宿遺跡の調査

はじめに 山野里宿遺跡については、今回報告する調査以外に、上郡町教育委員会により、2箇所で調査が行われている（第13図）。上郡町駅南住宅建設事業に伴う調査（第1次調査）と、上郡町駅西雨水ポンプ場建設工事に伴う調査（第2次調査）である。今回報告する調査地に近接し、本遺跡の位置付けにおいて欠かすことのできない資料が得られているため、本節で簡単にまとめておきたい。

なお、遺跡名についてであるが、本報告の調査も含めて、「山野里四ヶ日遺跡」として調査を実施したものである。しかし、山野里四ヶ日遺跡を含む形で山野里宿遺跡が登録されていた。そこで、遺跡名の混乱を避けるため、平成22年5月に遺跡の登録名を「山野里宿遺跡」に変更したものである。このため、以前「山野里四ヶ日遺跡」として発表した成果についても、本書をもって「山野里宿遺跡」と変更するものである。

また、本節の記述内容は、上郡町教育委員会島田 拓氏からの御教示によるものである。第1次調査 本発掘調査が、山野里2364-1他において、平成12年度に行われている。調査の結果、



第13図 山野里宿遺跡の調査

鎌倉時代から室町時代にかけての柱穴・井戸・土坑・溝などが検出されている。同時に、当該期の土器・木製品・銅錢が出土している。

土器については、備前焼・瓦質土器・土師器皿・青磁碗・瓦などが出土している。特に、瓦については、本報告と同様の「雲」銘の法雲寺創建に伴うと考えられる軒丸瓦が出土しており、注目されるものである。また、土器の示す時期・内容等とも、本報告と類似するものである。

第2次調査

本発掘調査が、山野里字四ッ日2734番地において、平成19年度に行われている。調査の結果、室町時代の旧河道および柱穴が検出されている。この調査で注目される成果として、旧河道に伴って船着場と考えられる遺構が検出されている。また、桟橋と考えられる遺構も検出されている。

遺物としては、土器・木製品・金属製品が出土している。土器としては、土師器皿・堀・羽釜、瓦質土器羽釜・火鉢・風炉・備前焼窯・壺・擂鉢・椀・青磁・白磁等と多岐におよび、量的にも多く出土している。この他、木製品としては漆椀・卒塔婆・編物・折敷・曲物・櫛等が、金属製品としては銅錢・鐵刀・鐵鑼・刀子等が、出土している。また、第1次調査同様、法雲寺創建に伴う軒丸瓦が出土している。

以上の出土遺物の示す年代は、15世紀後半～16世紀初頭に位置付けられるもので、本書で報告する遺構とほぼ一致する。

小 結 以上、2次にわたる上郡町教育委員会による調査は、本報告の成果と時期的・平面的に一連のものと考えられる。これらの調査成果と合せて、山野里宿遺跡の性格を検討する必要があると考えられる。



第14図 第2次調査

(1) 山田清朝「兵庫・山野里四ッ日遺跡」『木簡研究』第28号 木簡学会 2006

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

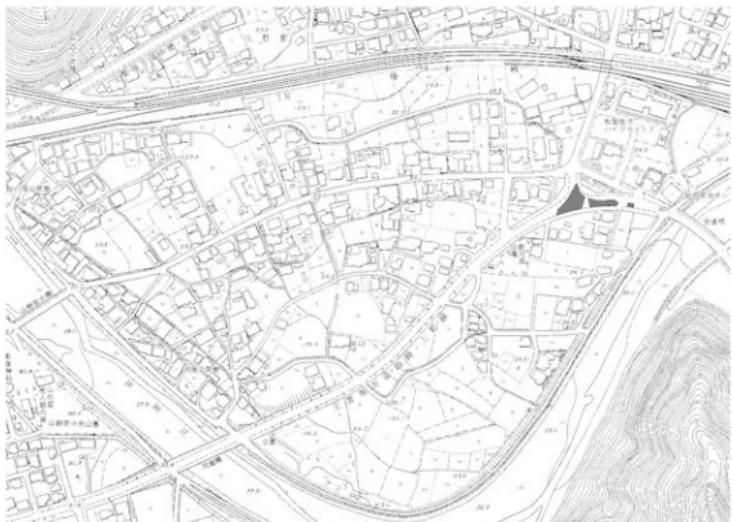
はじめに 兵庫県は、主要地方道姫路上郡線バイパス工事を計画している。主要地方道姫路上郡線は、姫路市田寺から上郡町落地を結ぶ県道である。この県道は、姫路から西進てきて、上郡町西脇で国道373号線に合流する。その後、373号線を1.3km北上し、同町旭町で西方へ分岐する。分岐後上郡橋を渡り、上郡駅へ向って南下し、上郡駅前で西側へクランクする。さらに山野里で再び南側へ折れ、JR山陽本線を渡り、今回の調査地の北側で再び西側へ折れ、宿東・宿西の集落を西進し、安室川を渡り、山端へ至っている。

工事計画 工事計画では、上郡町大持から同町竹万まで新橋を架け西進し、一端主要地方道赤穂・佐伯線と合流する。その後、安室川をわたった地点から宿東・宿西の集落を避けるようにその南側を南西方向に向かい、山端で旧道に合流させるものである。

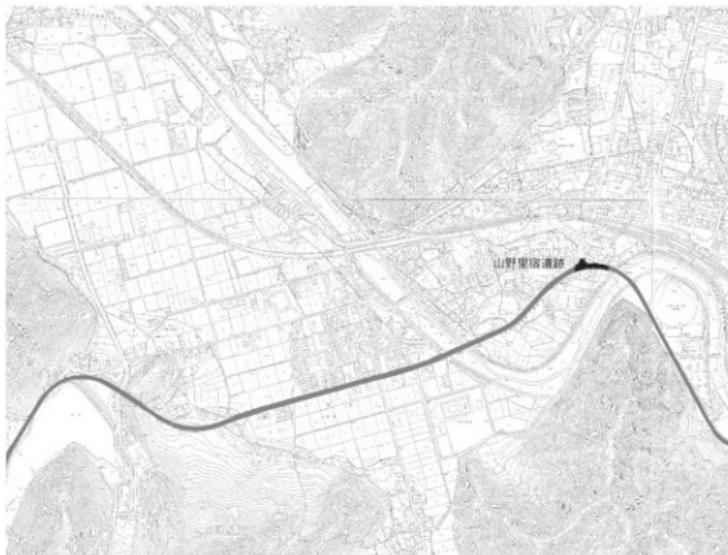
具体的には、上郡町大持から同町竹万まで新橋を架け西進し、一端主要地方道赤穂・佐伯線と合流する。その後、安室川をわたった地点から宿東・宿西の集落を避けるようにその南側を南西方向に向かい、山端で旧道に合流させるものである。



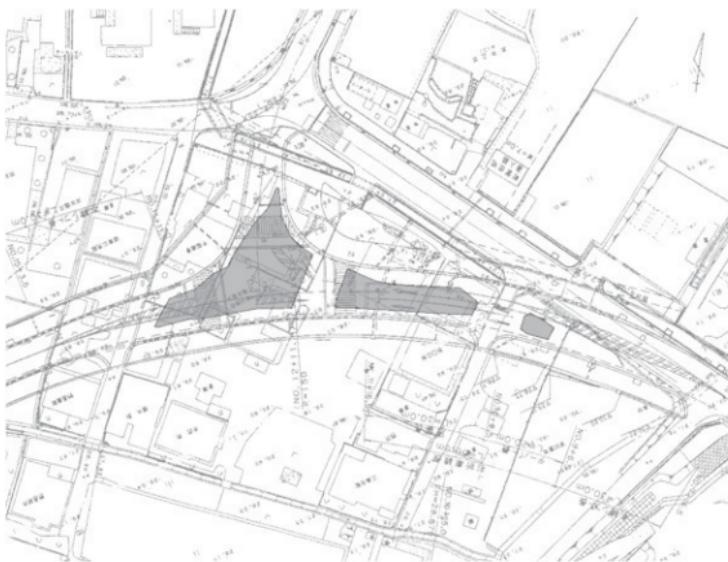
第15図 調査前の調査地



第16図 調査位置と姫路・上郡線（竣工後）



第17図 主要地方道姫路上都線と調査位置（1）



第18図 工事計画と調査位置図



第19図 主要地方道姫路上郡線と調査位置（2）

なお、当該事業に伴って、上郡町竹万において、竹万宮ノ前遺跡の本発掘調査が実施され、すでに調査報告書（上田健太郎『竹万宮ノ前遺跡』兵庫県教育委員会2009）が刊行されている。

工事概要
調査対象となった地区は、JR上郡駅の南西側にあたり、宿東・宿西集落の中央部を東西に通り抜けている箇所にあたる。この集落を避け、南側に新たな道路を造るものである。また、一部、旧道と当該道路を南北に結ぶ道路も計画されるにいたった。



第20図 竣工後の調査地（西から）

第2節 分布調査・確認調査

1. はじめに

山野里宿遺跡は、（主）姫路市郡線道路改良が計画された当時においては、埋蔵文化財の包蔵地としては周知されていなかった。しかし、古代山陽道とほぼ近接することや、付近に「宿」の付く地名が存在する（第27図）ことから、分布調査を実施することとなったものである。

2. 分布調査

概要等は以下のとおりである。

遺跡調査番号

2001053

調査期間

平成13年4月26日

調査担当

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）

藤田 淳・小川弦太

調査概要

調査対象地は、安室川に係る安室橋を北東端とし、それより西側約4kmの範囲である。

調査の結果、安室橋に近い地点2箇所において須恵器や土師器などの遺物の散布を確認した。このため、当地に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いものと判断されるに至った。

3. 確認調査

確認調査は、平成13年度に行われた分布調査の結果に基づくものである。その概要等は以下のとおりである。

遺跡調査番号

2004145

調査期間

平成16年4月15日

調査担当

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務

所 藤田 淳

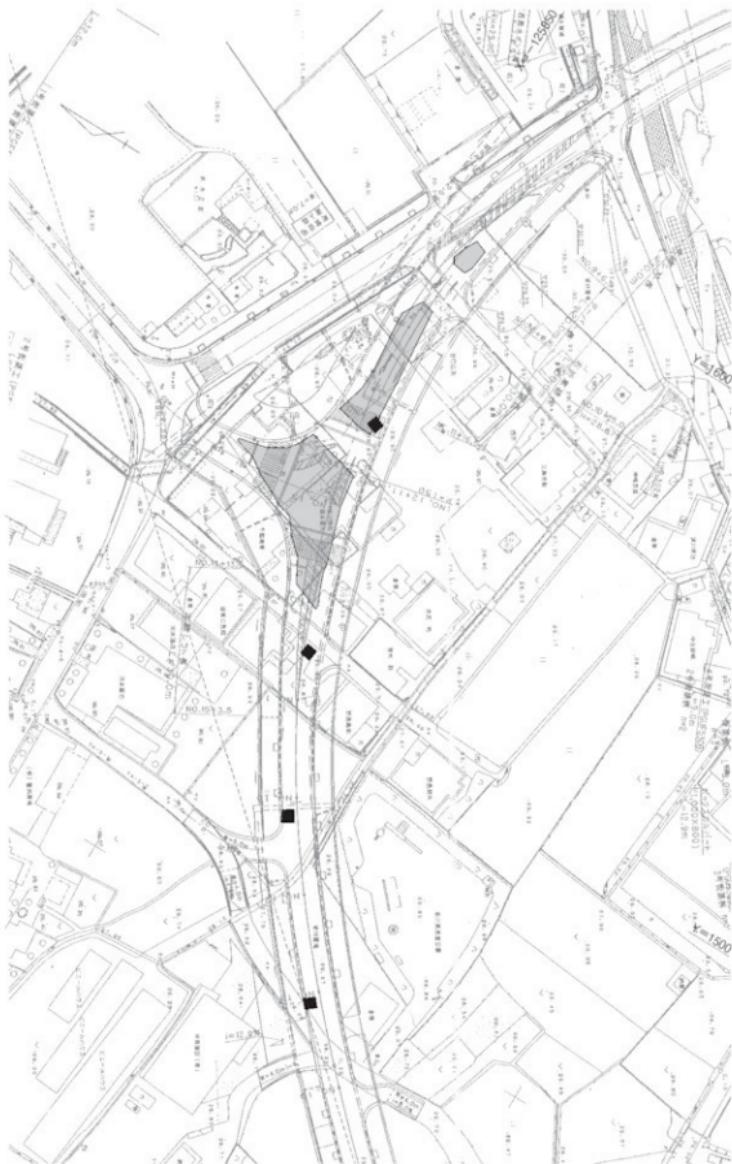
調査概要

調査は、2m×4mのグリッドを4箇所に設定（第22図）し、重機と人力により、埋蔵文化財の有無の確認に努めていった（第21図）。この結果、最も北東側のグリッドで、備前焼や土師器を包含する層を確認するとともに、その下面で柱穴および溝状の遺構（本発掘調査で旧河道と判明）を確認した。



第21図 確認調査

この結果、当該グリッドを中心に埋蔵文化財が包蔵されているとの判断に至った。



第22図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

1. 調査の概要

はじめに

調査地は、宅地と畠地が混在する地区を対象とした。このため、調査対象地内にも生活道路が存在し、調査対象から除外した。この生活道路を境に、東側を「I区」、西側を「II区」として、調査地を2分して調査を進めることとした。

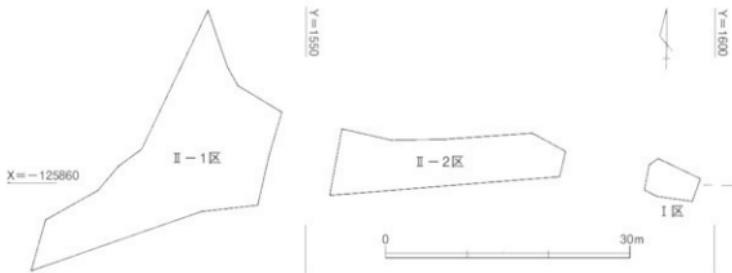
その後、II区の調査にあたって、調査に先立つ宅地の移転が完了していない地区があつたため、この箇所の調査は移転完了を待って行うこととなった。このため、II区についても2分割して調査を行うことになった。そこで、調査順に、西側を「II-1区」、東側を「II-2区」として、調査を進めていった（第23図）。以上から、II-1区→II-2区→I区の順に調査を実施した。

なお、II-1区とII-2区の中間については、水道管・ガス管等のライフラインが存在することが判明したため、この箇所については、調査対象外とした。

調査の手順

調査は、確認調査の結果に基づき、遺物を包含する層まで重機により掘削し、以下を人力により進めていった。また、調査途中、旧河道内から出土した編物（W11）の取上げにあたっては、整理保存班中村 弘と岡本一秀により、発泡ウレタンによる取上げを行った。

調査成果については、ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、これをもとに図化を行った。なお、空中写真撮影については、調査工程の関係から、II-1区とII-2区、I区の2回（11月16日・12月10日）にわけて実施した。



第23図 地区割図

普及活動

II-1区を調査中の11月4日には、山野里小学校6年生44名が、体験発掘を行った（第25図・第26図）。また、II-1区の調査が一段落した11月13日には地元住民を対象とした地元説明会を実施した。さらに、II-2区とI区の調査が一段落した12月11日にも、2

回目の地元説明会を実施した。



第24図 発泡ウレタンによる取上げ

遺跡調査番号

2004210

調査地

赤穂郡上郡町山野里四ヶ日

調査期間

平成16年10月19日～12月22日

調査面積

882m²(I 区 : 66m²・ II - 1 区 : 526m²・ II
- 2 区 : 290m²)

調査体制

調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化

財調査事務所（現兵庫県立

考古博物館）山田清朝

調査補助員 森崎由起子

現場事務員 前川みどり

室内作業員 入江友子・安岡圭紀



第25図 体験発掘（1）



第26図 体験発掘（2）



第27図 調査地と周辺の小字

第4節 整理作業

はじめに 整理作業は、平成21年度と22年度の2箇年で、兵庫県立考古博物館にて実施した。各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。

また、これに先立ち、平成17年には、出土木簡について、独立行政法人 奈良国立文化財研究所 渡辺見宏氏に判断をしていただくとともに、赤外線写真の撮影を行った。この成果については、『木簡研究』第28号 2006年 に報告済である。

平成21年度

整理概要	土器の接合・実測・復元・写真撮影を行った。これと平行して、造構図の整図を行った。また出土瓦について田中幸夫氏に実見していただき、御教示いただいた。
整理体制	整理保存班 岩田淳子 調査班 山田清朝 嘱託員 森本貴子・岡田美穂・高瀬敬子

平成22年度

整理概要	土器・木製品・本製品の実測・トレースを実施した。また、造構図の整図・トレースも行った。
	さらに、木製品の樹種同定・石製品の石材鑑定・動物遺体の鑑定・種子類の同定をバリノサーベイに、鉄滓の鑑定をJFEテクノリサーチ株式会社に委託した。この結果は、第4章にまとめてある。

輸入陶磁器については、亀井明徳氏に実見していただき、御教示いただいた。この他、上郡町教育委員会が調査した山野里宿遺跡出土資料について、上郡町教育委員会 烏田 拓氏の御好意により、同町にて実見させていただいた。また、関連資料として、姫路市古網干遺跡出土資料を、姫路市埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。

そして、上記の作業と平行して、原稿の執筆・編集を経て、本書の刊行へといたった。
整理体制 整理保存課 岡田章一・山本 誠
調査班 山田清朝
嘱託員 森本貴子・高瀬敬子



第28回 銅物の実測

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 概要

調査区

前章でも述べたが、生活道路・ライフライン等の確保の理由から、結果としてⅠ区・Ⅱ-1区・Ⅱ-3区の3地区に分けて調査を実施した（第23図）。

調査範囲

各調査区の調査は、確認調査の結果現地表面から深く、遺構検出面より上層は砂地であることが明らかであった。このため、安全確保のため、掘削範囲を工事範囲より狭く設定するとともに、掘削にあたっては安全勾配に配慮した。このため、工事計画に対して、遺構検出範囲が狭くなっている。

2. 基本土層と遺構の検出

基本土層

調査区は、Ⅰ区・Ⅱ-1区・Ⅱ-2区の3地区からなるが、ここでは一括して報告する（第30図・第32図）。3地区で共通して認められる層は、上から盛土層（1層）・旧耕作土層（2層）・床土層（3層）・土壤層（Ⅱ-2区4～6層）・基盤層（Ⅰ区7層・Ⅱ-2区10層・Ⅱ-1区20層）である。



第29図 Ⅱ-1区東壁

盛土層

調査区全域にわたって認められた層である。各地区ともその厚さはほぼ同じで、70cm～80cmを測る。層中に瓶等の混入が認められたことから、昭和時代以降の盛土と考えられる。

旧耕作土層

当層についても、調査区全域にわたって認められた。盛土層が形成される以前まで耕作されていた層である。その上面の標高に差は認められない。

床土層

旧耕作土層に対応する層である。調査区全域にわたって認められた。なお、Ⅱ-1区東側では、旧耕作土層との間に1層（3層）が認められるが、当層についても床土層の可能性が考えられる。

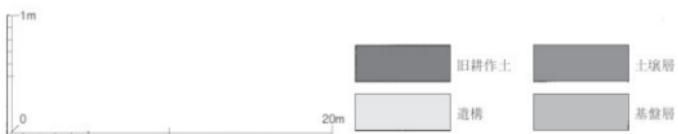
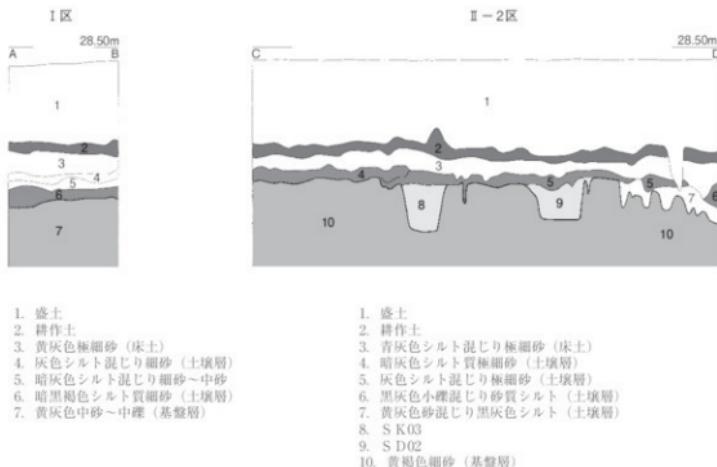
土壤層

Ⅰ区からⅡ-2区にかけて認められた。基盤層の直上の層である。基本的には基盤層と同時に形成された層で、その土壤化された部分である。本来的には、当層上面が当時の地表面に対応するものと考えられる。ただし、Ⅱ-2区西端部で認められた7層については、整地層の可能性が考えられる。したがって、5層・6層については、基盤層とは起源が異なる可能性が考えられる。

なおⅡ-1区においては、Ⅰ区・Ⅱ-2区と対応する土壤層は認められなかった。

基盤層

遺構を検出した面が上面となる層である。細砂～中礫からなる層で、その粒度の分布状況から、西側から堆積したものと考えられる。なお、基盤層中からは古墳時代後期および奈良時代の須恵器が出土している（図版20）。したがって、遺構面となった基盤層は当該期



第30図 基本土層図（I区・II-2区）

以降に形成されたものと考えられる。

その他

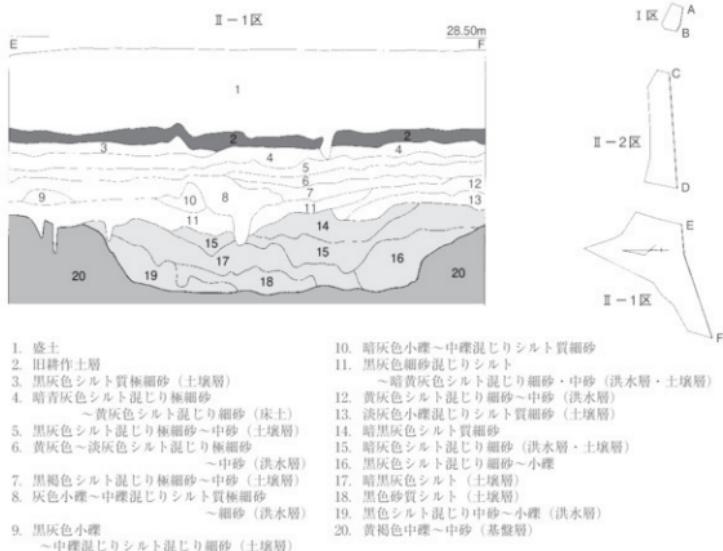
II - 1 区では、他の地区とは異なり、床土層以下、基盤層との間が大きく異なっていた。これは、当地区的南側が旧河道上にあったことが大きな要因と考えられる。旧河道自体は、基本的には洪水等により埋没しているが、後世まで窪地となっていた。この窪地を埋めるように、数次にわたる堆積が認められた。いずれも、基本的には洪水に起因する層である。

遺構の検出

遺構は基礎層上面で検出している。検出面は、この1面のみである。その標高は、I区中央部で27.25m、II - 2 区東端部で27.40m、II - 2 区西端部で27.05m、II - 1 区東端部で27.03m、II - 1 区北端部で27.40mである。このように、II - 1 区北部からII - 2 区にかけて、標高が高くなっている。また、旧河道底部の標高は、26.40mである。



第31図 旧河道の検出作業



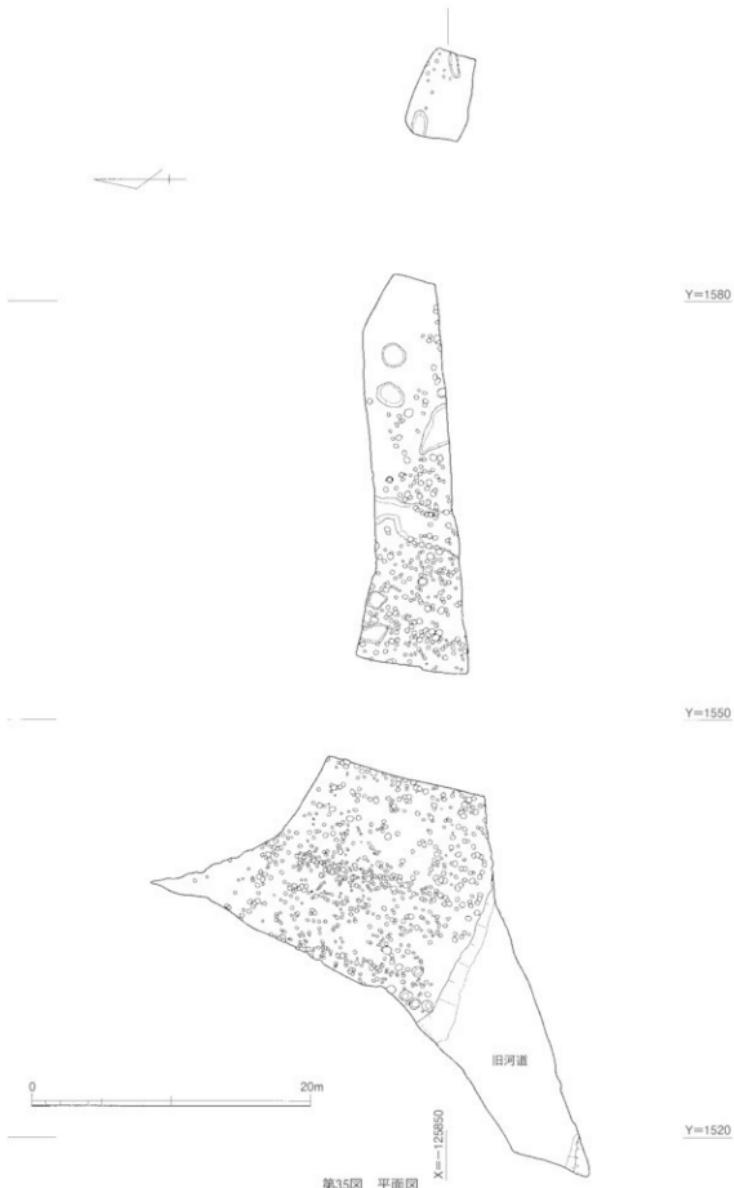
第32図 基本土層図（II-1区）



第33図 遺構の検出 (1)



第34図 遺構の検出 (2)



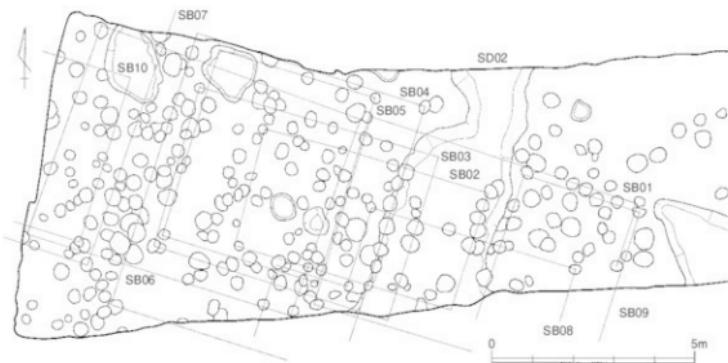
第35図 平面図

第2節 調査の成果

はじめに 道構としては、掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝・井戸・旧河道を検出している（第35図）。道構の分布はII-1区が中心で、II-2区・I区と、東側ほど希薄である。

1. 掘立柱建物跡

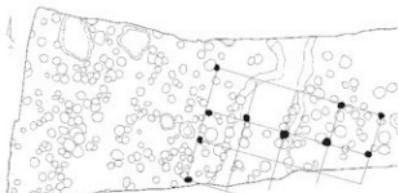
はじめに 30棟の掘立柱建物跡（SB01～SB30）を検出した。検出されたのはII-1区とII-2区に限られ、特にII-2区の西半部以西に限定される。



第36図 II-2区掘立柱建物群

SB01（モノクロ図版61）

検出状況 II-2区建物群で検出した（第36図）。SD02と切り合った関係にあるが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。ただし、SD02と平面的に重複するP5とP6は、SD02を検出後に明らかとなった柱穴である。ま

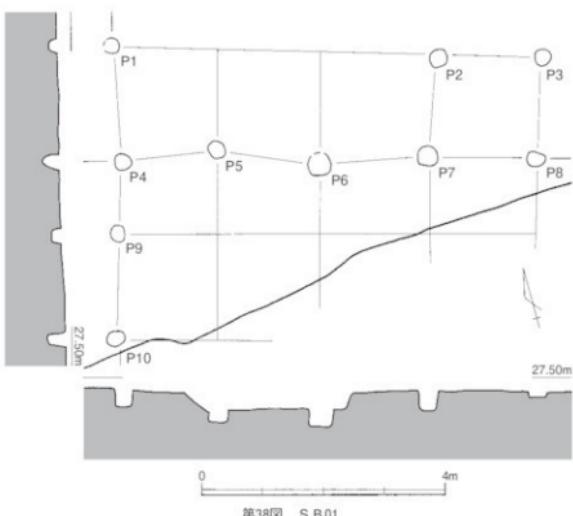


第37図 SB01の位置

た、建物の南東部は調査区外となり、全体を検出することはできなかった（第37図）。

建 物 梁行3間、桁行4間の純柱建物である（第38図）。ただし、SD02と平面的に重複する箇所においては、柱穴を検出することはできなかった。建物の規模は、西梁行（P1-P10）で4.80m、中央部桁行（P4-P8）で6.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は32.64m²である。また、西梁行（P1-P10）を基準とした棟軸方向は、N11°30' Eを示す。なお、各柱穴間の距離等は第2表の通りである。

柱 穴 SD02と平面的に重複する箇所を中心に、数穴が検出できなかった。柱穴の平面形はすべて円形を呈する。ただし、整円ではなく、不定形傾向にある。その規模は、23cm～37cm



と小規模である。柱痕については、全て確認できなかった。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。なお、各柱穴の規模は第2表の通りである。

出土遺物

土器

P10から土師器の碗と備前焼の壺の体部片が出土している。他の柱穴からは、遺物は全く出土していない。図化できたのは、土師器の碗1個体(1)に限られる(図版1)。口縁部を中心に残存するが、磨滅が著しく、調整等は観察できない。

鉄製品

P6から鉄釘(M9)が出土している(図版34)。先端を欠き、く字形に屈曲している。頭部も頭巻と考えられるが、残存状況は良好ではない。残存長52cmを測り、断面は2.5mm×3.5mmの方形をなす。

時期

出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。

第2表 S B01 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離(m)
西梁行	P1-P4	1.90	4.80	1.60
	P4-P9	1.20		
	P9-P10	1.70		
中央桁行	P4-P5	1.55	6.80	1.70
	P5-P6	1.65		
	P6-P7	1.80		
	P7-P8	1.80		

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P1	26	-	15
P2	29	-	15
P3	26	-	12
P4	30	-	27
P5	28	-	19
P6	37	-	26
P7	34	-	35
P8	30	-	10
P9	23	-	13
P10	30	-	31

S B02

検出状況

II - 2 区建物群で検出した（第36図）。S D02と切り合い関係にあるが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。ただし、S D02と平面的に重複する東半部の柱穴は、S D02を検出後に明らかとなつた柱穴である。又、建物の南東隅は調査区外となり、1穴を検出することはできなかった。

建 物

梁行2間、桁行3間の総柱建物である（第40図）。西梁行のラインがわずかに平行・直角関係はないが、全体的に整った平面形をなす。建物の規模は、北桁行（P 1 - P 4）で5.87m、西梁行（P 1 - P 9）で2.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.02m²である。また、北桁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、N 15° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第3表の通りである。

柱 穴

調査区外の1穴を除く全ての柱穴を検出することができた。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈するが、多くは整った平面形をなさない。その規模は、19cm~38cmと小規模で、検出面からの深さは4cm~40cmである。

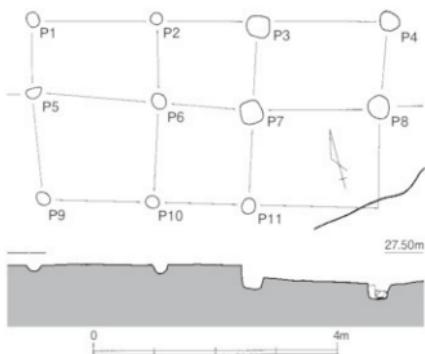
柱痕については、全て確認できなかった。また、P 8においては柱穴内に礎石が埋めら

第3表 S B02 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
北桁行	P 1 - P 2	2.05	5.87	1.96
	P 2 - P 3	1.65		
	P 3 - P 4	2.17		
西梁行	P 1 - P 5	1.20	2.90	1.45
	P 5 - P 9	1.70		



第39図 S B02の位置



第40図 S B02

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	-	4
P 2	19	-	13
P 3	35	-	
P 4	33	-	31
P 5	30	-	10
P 6	23	-	15
P 7	38	-	40
P 8	36	-	25
P 9	23	-	16
P 10	22	-	7
P 11	22	-	20

れていた。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。なお、各柱穴の規模は第3表の通りである。

出土遺物 P 10から備前焼窯の体部片・同窯の肩部片が、P 6から備前焼窯の体部片が出土しているが、いずれも小片のため同化できなかった。この他、P 4から粘土塊が出土している。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

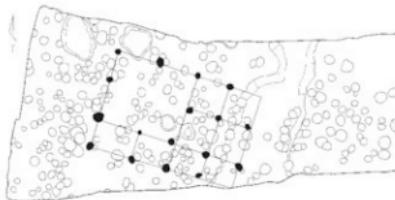
S B03

検出状況

II - 2区建物群で検出した（第36図）。S D02と切り合った関係にあるが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。ただし、S D02と平面的に重複する東半部の柱穴は、S D02を検出後には明らかとなった柱穴である。

建物の南東隅の1穴は調査区外にあたるものと考えられるが、建物のはほとんどが検出されている。

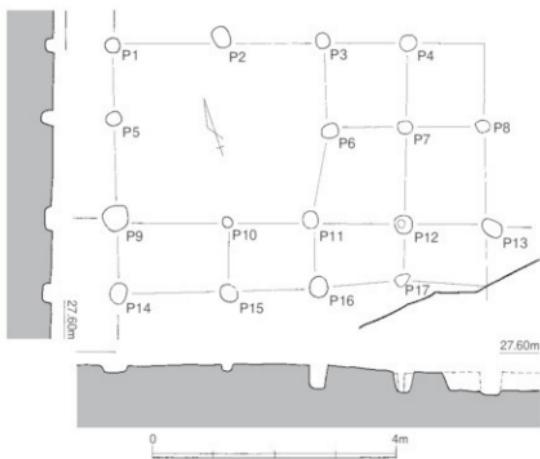
建 物 梁行3間・桁行4間の総柱建物である（第42図）。ただし、南東隅が調査区外にあたるほ



第41図 S B03の位置

第4表 S B03 建物規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
桁 行	P 9 - P 10	1.85	6.25	1.56
	P 10 - P 11	1.40		
	P 11 - P 12	1.55		
	P 12 - P 13	1.45		
西梁行	P 1 - P 5	1.20	4.10	1.37
	P 5 - P 9	1.65		
	P 9 - P 14	1.25		



第42図 S B03

か、北東隅とP 5 - P 6 間の1穴が検出されていない。

建物の規模は、桁行方向(P 9 - P 13)で6.25m、西梁行(P 1 - P 14)で4.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は25.62m²である。また、西梁行を基準とした棟軸方向は、N 15° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第4表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈するが、多くは整った平面形をなさない。その規模は、18cm~42cmと小規模で、検出面からの深さは11cm~39cmである。柱痕については、P 12において断面観察の結果、確認することができた。また、P 12においては柱穴内底部に扁平な石を据え、その上に柱が建てられていたことが確認できた(第43図)。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第5表の通りである。

出土遺物

土師器と備前焼が出土している。

土師器

P 9から椀Ab(2)が出土している(図版1)。他の椀と比較して、底部から口縁部にかけて薄く仕上げられている。この他、P 5・P 14・P 17から皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

備前焼

P 2から壺の体部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期

出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。

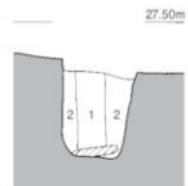
S B 04

検出状況

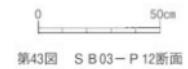
II-2区建物群で検出した(第36図)。S D 02と切り合いで関係があるが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。ただし、S D 02と平面的に重複する柱穴は、S D 02を検出後に明らかとなった柱穴である。また、建物の北西隅と南東部は調査区外にあたり、建物全体を検出することはできなかった。

建物

梁行3間・桁行4間の総柱建物である(第45図)。ただし、北西隅と南東隅が調査区外にあたるため、北西隅の1穴と南東隅の2穴を欠く。また、P 6間の南側についても土坑と



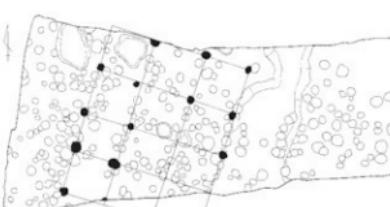
1. 灰色シルト混じり中砂
～細砂(柱痕)
2. 黄色シルト混じり
暗灰色シルト混じり細砂



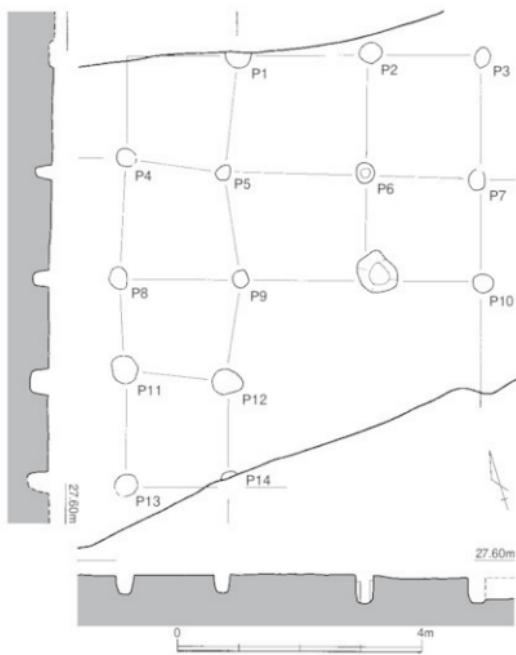
第43図 S B 03 - P 12断面

第5表 S B 03 柱穴規格一覧

No	平面規模(cm)	柱痕(cm)	深さ(cm)
P 1	25	-	14
P 2	30	-	22
P 3	23	-	26
P 4	28	-	36
P 5	26	-	29
P 6	30	-	39
P 7	25	-	21
P 8	27	-	35
P 9	42	-	14
P 10	18	-	11
P 11	26	-	29
P 12	32	12	37
P 13	35	-	16
P 14	28	-	37
P 15	30	-	23
P 16	31	-	25
P 17	19	-	32



第44図 S B 04の位置



第45図 SB04

の切り合いのため検出できなかったほか、P 12の東側についても検出できなかった。

建物の規模は、桁行方向（P 1 - P 14）で7.08m、梁行方向（P 4 - P 7）で5.72mを測り、両者を基準とした建物の面積は40.49m²である。また、P 3 - P 10を基準とした棟軸方向は、N 17° Eを示す。なお、各柱穴間の距離等は第6表の通りである。

第6表 SB04 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱径 (cm)	深さ (cm)
桁行	P 1 - P 5	1.90	7.08	1.77	P 1	43	-	13
	P 5 - P 9	1.78			P 2	40	-	18
	P 9 - P 12	1.70			P 3	28	-	25
	P 12 - P 14	1.70			P 4	31	-	30
梁行	P 4 - P 5	1.60	5.72	1.91	P 5	25	-	31
	P 5 - P 6	2.30			P 6	30	15	43
	P 6 - P 7	1.82			P 7	30	-	39
					P 8	30	-	29
					P 9	24	-	35
					P 10	32	-	62
					P 11	43	-	30
					P 12	44	-	39
					P 13	37	-	46
					P 14	28	-	41

柱穴 柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈するが、多くは整った平面形をなさない。規模においても、25cm~43cmと一定していない。また、検出面からの深さは13cm~62cmと、その差が顕著である。

柱痕については、P 6において断面観察の結果確認することができ、その規模は15cmである。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第6表の通りである。

出土遺物 土師器・瓦質土器・備前焼が出土している（図版1）。

土師器

皿と椀が出土している。

皿

P 10から皿A（5）が、P 12から皿Ab（6）が、P 13から皿Aa（4）が出土している。5については、磨滅が著しく調整・切り離し方法は観察できないが、形態の特徴等から楕円形によるものと判断したものである。また、4の見込みには仕上げナデが認められる。この他、小片のため図化できなかったが、P 8から口縁部片が出土している。

椀

P 11から口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦質土器

P 11から擂鉢の体部片が、P 13から壺の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

備前焼

P 12から壺の口縁部片（3）が出土している。口縁部を大きく折り返し、断面梢円形の玉縁をなす。肩部外面が横方向のヘラナデによる以外、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

この他、P 10から擂鉢の体部片が、P 2とP 10から壺の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

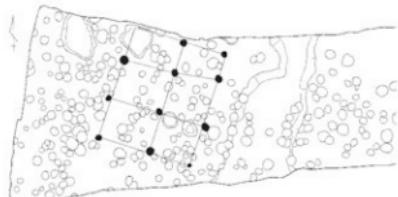
時期

出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

S B 05（モノクロ図版12）

検出状況

II-2区建物群で検出した（第36図）。S D 02の西側に位置する。建物の北西隅が土坑と重複するため検出できなかった以外、建物全体が検出されている（第46図）。



第46図 S B 05の位置

建物

梁行2間・桁行3間の純柱建物である（第47図）。北西隅を欠く以外、全ての柱穴が検出されている。P 2~P 5間が短い以外、柱間の規模はほぼ一定している。また、柱筋も比較的通っている。

建物の規模は、東桁行（P 2~P 11）で4.75m、南梁行（P 9~P 11）で3.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は18.52m²である。また、東桁行を基準とした棟軸方向は、N 19° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第7表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、17cm~35cmと全体的に小型である。また、検出面からの深さは9cm~45cmとその差が顕著である。

いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第7表の通りである。

出土遺物 土師器・瓦質土器・備前焼が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。

土師器 P 11から甌の体部片が出土している。

瓦質土器 P 9から鉢鉢の体部片(7)が出土している(写真図版12)。内面には7条の卸し目が引かれている。外面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

備前焼 P 8から甌の体部片が出土している。暗赤灰色を呈し、外面はハケ調整により仕上げられている。

時期 出土遺物から判断して、前半期(14世紀中頃～後半)と考えられる。

第7表 S B05 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離(m)	舞面距離(m)	柱穴間平均距離(m)
東桁行	P 2 - P 5	1.00	4.75	1.58
	P 5 - P 8	2.10		
	P 8 - P 11	1.65		
南梁行	P 9 - P 10	2.20	3.90	1.95
	P 10 - P 11	1.70		

No	平面規模(cm)	柱痕(cm)	深さ(cm)
P 1	29	-	34
P 2	23	-	20
P 3	34	-	38
P 4	24	-	14
P 5	30	-	12
P 6	22	-	9
P 7	26	-	45
P 8	32	-	18
P 9	26	-	38
P 10	35	-	13
P 11	17	-	30

S B06

検出状況 II-2区建物群で検出した(第36図)。S D02の西側に位置する。南西隅の1穴(P 13)の一部を欠く以外、建物全体が検出されている(第48図)。また、S B03・S B04・S B05等と平面的に重複するが、その前後関係を明らかにすることは困難である。

建物 東西方向に桁行をとる、梁行3間・桁行3間の純柱建物である(第49図)。P 13の一部を欠く以外、全ての柱穴が検出されている。全体的に柱筋の通りはよくなく、建物全体もやや歪んだ長方形をなしている。桁行において、中間の柱間が他より狭い傾向にある。

建物の規模は、北桁行（P1-P4）で6.70m、西梁行（P1-P13）で5.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は36.51m²である。また、西梁行を基準とした棟軸方向は、N20°30' Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第8表の通りである。

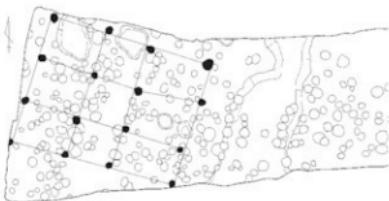
柱穴 柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、25cm~43cmを測り、基本的には30cm大からなる。また、検出面からの深さは11cm~56cmとその差が顕著である。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第8表の通りである。

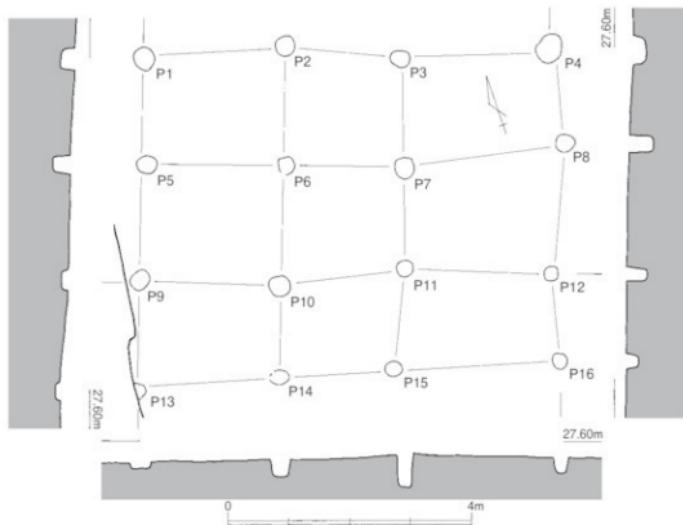
出土遺物 土師器・瓦質土器・須恵器・備前焼・土製品が出土している（図版1）。

土師器 盆・椀・壺が出土している。

皿 P2・P7・P14から出土している。いずれも小片のため図化できなかった。このなかで、P7から出土した底部片は糸切り痕が認められ、皿Aaに分類されるものと考えられる。



第48図 S B 06の位置



第49図 S B 06

第8表 SB06 建物・柱穴規格一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No.	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北桁行	P 1 - P 2	2.35	6.70	2.23	P 1	33	-	23
	P 2 - P 3	1.90			P 2	31	-	31
	P 3 - P 4	2.45			P 3	32	-	18
東梁行	P 4 - P 8	1.55	5.10	1.70	P 4	43	-	22
	P 8 - P 12	2.15			P 5	35	-	33
	P 12 - P 16	1.40			P 6	25	-	25
南桁行	P 13 - P 14	2.35	7.00	2.33	P 7	33	-	46
	P 14 - P 15	1.90			P 8	31	-	34
	P 15 - P 16	2.75			P 9	34	-	11
西梁行	P 1 - P 5	1.75	5.45	1.82	P 10	34	-	30
	P 5 - P 9	1.90			P 11	27	-	56
	P 9 - P 13	1.80			P 12	25	-	22
					P 13	30	-	12
					P 14	31	-	22
					P 15	29	-	42
					P 16	26	-	18

- 椀 P 3 から体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 鍋 P 12 から口縁部片（8）が出土している。鍋Aの口縁部片と考えられ、内面は横ナデにより仕上げられている。この他、P 5 から体部片が出土しており、外面は叩き整形により仕上げられ、煤の付着が認められる。
- 瓦質土器 P 10 から鍋の鍔が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 須恵器 P 13 から捏鉢の口縁部片（9）が出土している。内端部がわずかに上方につまみあげられている。
- 備前焼 壺と甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。
- 壺 P 1 から体部片が出土している。
- 甕 P 1・P 11・P 14・P 15 から出土している。
- いずれも体部片が出土している。なかでも、P 11 と P 15 から出土した体部片は一見したところ須恵質に焼き上げられており、外面はハケ調整により仕上げられている。ただし、P 15 から出土した体部片は暗赤灰色を呈する。
- 土製品 P 1 から輪の羽口片（10）が出土している。3.6cm × 4.25cm の小片で、内面の曲面がわずかに残存する。厚さは3.15cmである。
- 時期 出土遺物から判断して、前半期（14世紀中頃～後半）と考えられる。

SB07 (モノクロ図版12)

- 検出状況 II - 2 区建物群で検出した（第36図）。建物群の西側に位置する。建物の大半は調査区外にあたり、検出できたのは建物の東側桁行に限られる（第50図）。
- 建物 南北方向に桁行をとる総柱建物と考えられる（第51図）。また、調査区北側へ拡がる可能性も考えられる。東側桁行と建物内部の1穴（P 1）に限られる。建物の規模は、東桁行（P 2 - P 5）で5.60mを測る。また、東桁行を基準とした棟軸方向は、N 22° Eを示す。なお、各柱穴間の距離等は第9表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形をなす。柱穴の規模は、23cm~43cmを測り、基本的には30cm大からなる。また、検出面からの深さは13cm~27cmと、その差が顕著である。P 1において柱痕を検出した以外は、柱痕を検出・確認することはできなかつた。埋土は、いずれも暗灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第9表の通りである。

出土遺物

土師器・瓦質土器・備前焼が出土している（図版1）。

土師器

P 3とP 5から皿の口縁片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかつた。

瓦質土器

P 3から壺の口縁部片（14）が出土している。口縁部外面には、断面三角形に近い小規模な鈎が貼り付けられ、横ナデにより仕上げられている。内面は横方向のハケ調整後、横ナデにより仕上げられている。焼しが不十分で、土師器に近い特徴を示している。

備前焼

鉢・擂鉢・壺が出土している。

鉢

P 3から口縁部片（11）が出土している。鉢目が認められないことから、鉢として報告する。外面が、ユビオサエの後回転ナデ調整により仕上げられている。体部内面には使用痕が認められる。

擂鉢

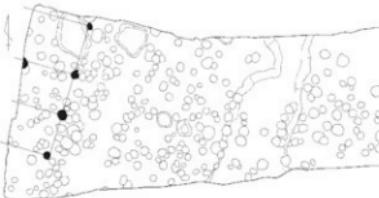
P 3から口縁部の小片（12）と完形に復元できる個体（13）が出土している。13は、基本的に回転ナデ調整により仕上げられているが、体部下端外面はヘラ削りにより仕上げられている。底部はナデ調整により仕上げられている。

壺

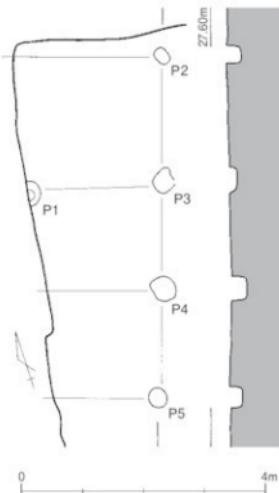
P 2とP 5から体部片が出土している。いずれも赤褐色を呈する。

時期

出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。



第50図 S B07の位置



第51図 S B07

第9表 S B07 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
東桁行	P 2 - P 3	2.05	5.60	1.87
	P 3 - P 4	1.75		
	P 4 - P 5	1.80		

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	43	15	16
P 2	23	-	23
P 3	54	-	13
P 4	38	-	27
P 5	30	-	19

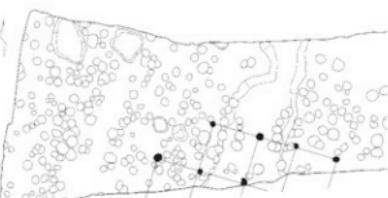
S B 08

検出状況 II - 2区建物群で検出した（第36図）。建物群の東側に位置する。建物の大半は調査区外で、検出できたのは建物の北半部に限られる（第52図）。

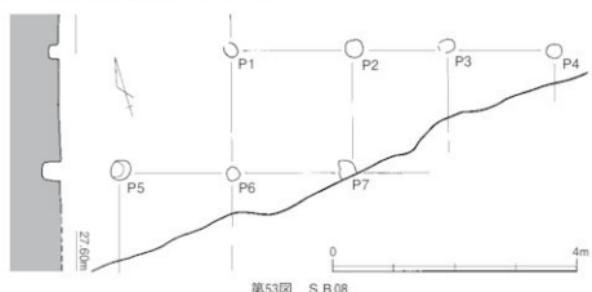
建 物 東西方向に4間の桁行をとる純柱建物と考えられる（第53図）。ただし、南部は調査区外にあた

り、全体の規模は不明である。また、北西隅の1穴を欠く。当初から存在しなかった可能性が考えられる。建物の規模は、桁行（P1-P4 + P5-P6）で7.25mを測る。また、梁行（P1-P6）を基準とした棟軸方向は、N23°30' Eを示す。

なお、各柱穴の距離等は第10表の通りである。



第52図 S B 08の位置



第53図 S B 08

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は21cm~34cmを測り、基本的には30cm大からなる。また、検出面からの深さは10cm~38cmと比較的同規模である。P5において柱痕を検出した以外は、柱痕を検出・確認することはできなかった。埋土は、黒灰色シルト混じり細砂1層である。

なお、各柱穴の規模は第10表の通りである。

出土遺物 P5から土師器の皿（15）が出土している（図版1）。内外面とも磨滅が著しく、詳細な調整等は観察できないが、形態的特徴から皿Aに分類されるものである。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

第10表 S B 08 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
桁 行	P 1 - P 2	2.05		7.25	P 1	21	-	13
	P 2 - P 3	1.50			P 2	30	-	10
	P 3 - P 4	1.80			P 3	24	-	16
	P 5 - P 6	1.90			P 4	28	-	14
					P 5	34	20	38
					P 6	22	-	33
					P 7	28	-	23

S B 09 (カラー図版20)

検出状況

II - 2 区建物群で検出した (第36図)。建物群の東側に位置する。建物の1/2は調査区外で、検出できたのは建物の北半部に限られる (第54図)。

建 物

南北方向に桁行をとる矩柱建物である (第55図)。ただし、南部は調査区外にあたり、全体の規模は不明である。また、P 4 - P 6 間の柱通りは良好ではない。建物の規模は、北梁行 (P 1 - P 3) で 2.95m を測る。また、西桁行については、2.80 m (P 1 - P 7) を検出している。西桁行 (P 1 - P 7) を基準とした棟軸方向は、N 21° E を示す。

なお、各柱穴間の距離等は第11表の通りである。

柱 穴

柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、30cm

前後であるが、P 5 のみ 50cm と突出している。また、検出面からの深さは 11cm ~ 42cm と、差が認められる。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第11表の通りである。

出土遺物

土師器・青磁・瓦が出土している。

土師器

P 4 から皿の口縁片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

青 磁

P 4 から碗の底部片 (16) が出土している (図版1)。龍泉窯系青磁碗の底部で、内面全面に釉が掛けられ、見込みには印花文が陰刻されている。高台は回転ヘラ削りにより成形されている。高台疊付から内側は露胎しているが、疊付に一部釉が付着している。

瓦

P 7 から丸瓦が出土している。凹面には布目が認められ、凸面はヘラナデにより仕上げられている。小片のため図化できなかった。

時 期

出土遺物から判断して、後半期 (15世紀) と考えられる。

第11表 S B 09 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No.	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P 1 - P 2	1.50	2.95	1.48	P 1	27	-	33
	P 2 - P 3	1.45			P 2	30	-	17
西桁行	P 1 - P 4	1.30	2.80	1.40	P 3	31	-	11
	P 4 - P 7	1.50			P 4	37	-	25
					P 5	50	-	37
					P 6	25	-	11
					P 7	38	-	42

S B 10

検出状況 II - 2 区建物群で検出した（第36図）。建物群の西側に位置する。建物の大半は調査区内で、検出できたのは建物の東桁行が中心である（第56図）。

建 物 南北方向に桁行をとる矩柱建物と考えられる（第57図）。ただし、西半部は調査区外であり、

全体の規模は不明である。また、北東隅については、SK 06と切り合い関係にあり、柱穴を検出することはできなかった。建物の規模は、桁行（P 1 - P 2 + P 3 - P 5）で425mを測る。また、梁行については、P 2 - P 3 間で1.60mを測る。東桁行（P 3 - P 5）を基準とした棟軸方向は、N 16° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第12表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、P 5 を除いては30cm前後である。また、検出面からの深さは13cm～37cmである。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、P 1においては、柱穴内に上面が平坦な石が置かれていた（第58図）。ただし、調査では柱痕との関係を確認することはできなかった。柱を建てる前に置かれたものと考えられる。

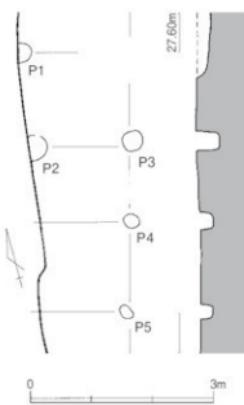
なお、各柱穴の規模は第12表の通りである。

出土遺物 P 3 から備前焼の甕が出土している。体部の小片で、焼き上がりは一見したところ須恵質となっている。外面はハケ調整により仕上げられ、赤灰色を呈する。

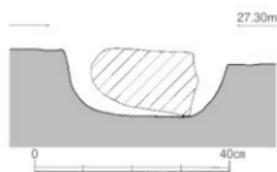
時 期 出土遺物から判断して、前半期（14世紀中頃～後半）と考えられる。



第56図 S B 10の位置



第57図 S B 10

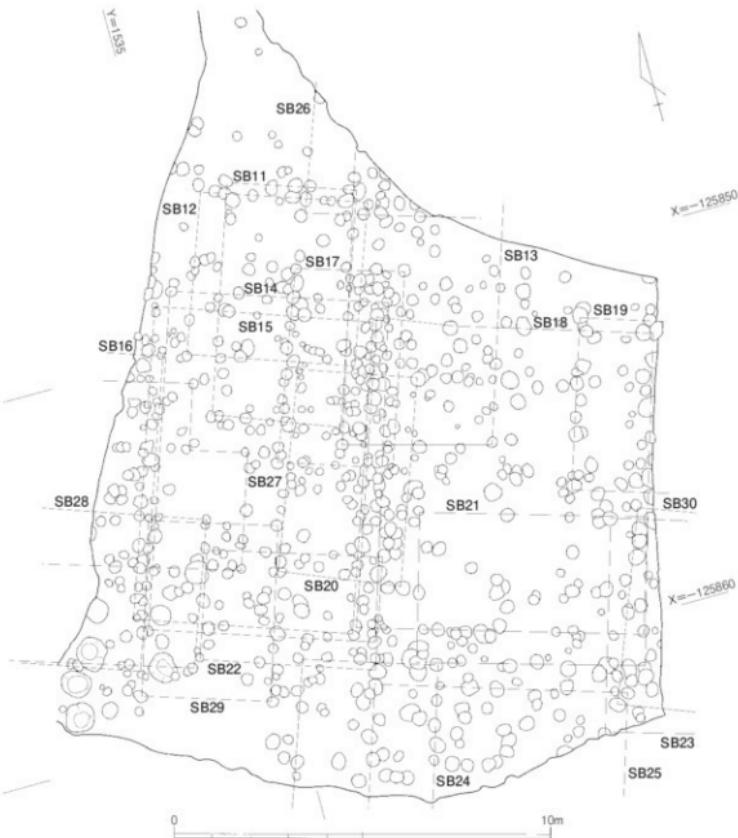


第58図 S B 10-P1断面

第12表 S B 10 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
桁 行	P 1 - P 2	1.55	425	1.42
	P 3 - P 4	1.20		
	P 4 - P 5	1.50		

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	-	13
P 2	(30)	-	15
P 3	34	-	37
P 4	27	-	20
P 5	20	-	18



第59図 II - 1 区掘立柱建物群

SB11

検出状況 II - 1 区建物群で検出した(第59図)。建物群の北側に位置する。建物全体が調査区内で検出されている。後世の搅乱を受けず、全ての柱穴が検出されている。(第60図)。

建 物 南北方向に桁行をとる 2間×3間の純柱建物である(第62図)。建物の規模は、西桁行(P1-P10)で6.25m、北梁行(P1-P3)・南梁行(P10-P12)ともに3.55mを測る。このため、建物全体が整った長方形をなしている。北梁行と西桁行を基準とした建物の平面積は、22.18m²である。また、西桁行(P1-P10)を基準とした棟軸方向は、N19°Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第13表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は円形もしくは椭円形を呈する。柱穴の規模は、22cm~39cmとほぼ一定し

ている。また、検出面からの深さは10cm~36cmである。P 5とP 10において柱痕を検出した以外は、検出・確認することはできなかった。

この他、P 1においては、柱抜き取り後に比較的平坦な石が置かれていた。さらに、P 10においては、柱穴底部に扁平な石を置き、その上に柱が建てられていた（第61図）。

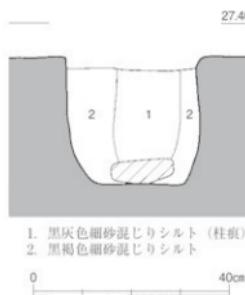
なお、各柱穴の規模は第13表の通りである。

出土遺物
土師器・備前焼・瓦が出土している。いずれも、小片のため國化できなかった。

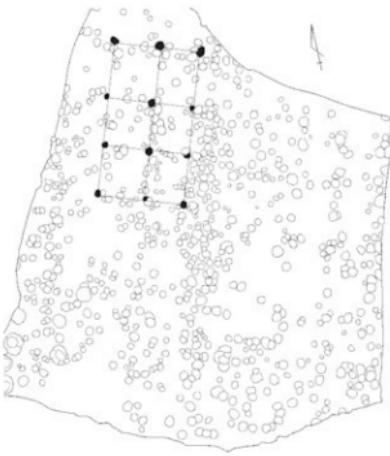
土師器
P 12から皿の口縁片が、P 4から椀が、P 9から壠が出土している。椀は、底部から体部にかけて残存し、椀A bと考えられ、底部はヘラ切りにより切り離されている。壠は、体部片が出土しており、外面は叩き成形により仕上げられ、煤の付着が認められる。

備前焼
P 3とP 12から壺の体部片が出土している。

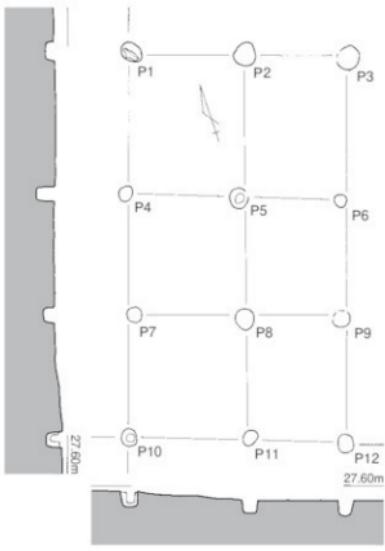
瓦
P 12から平瓦が出土している。燃し焼成によるものであるが、焼成は不十分である。凹面はヘラナデにより、凸面はナデ調整



第61図 S B11-P10断面



第60図 S B11の位置



第62図 S B11

第13表 SB11 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No.	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P1-P2	185	3.55	1.78	P1	30	-	10
	P2-P3	170			P2	39	-	11
東桁行	P3-P6	235	6.35	2.12	P3	35	-	21
	P6-P9	195			P4	22	-	26
	P9-P12	205			P5	30	-	15
南梁行	P10-P11	195	3.55	1.78	P6	28	-	30
	P11-P12	160			P7	23	-	16
西桁行	P1-P4	230	6.25	2.08	P8	33	-	36
	P4-P7	195			P9	28	-	11
	P7-P10	200			P10	25	-	27
					P11	25	-	20
					P12	26	-	32

により仕上げられている。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

SB12（モノクロ図版12）

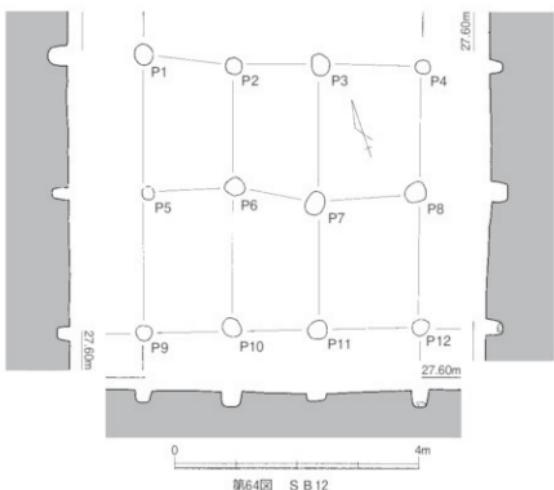
検出状況 II-1区建物群で検出した（第59図）。建物群の北側に位置する。建物全体が調査区内で検出されている。後世の搅乱を受けず、全ての柱穴が検出されている（第63図）。

建 物 東西方向に桁行をとる2間×3間の総柱建物である（第64図）。建物の平面形は、北桁行が他の桁行・梁行と平行、直交関係からずれるが、比較的整った長方形をなす。建物の規模は、北桁行（P1-P4）で4.65m、東梁行（P4-P12）で4.30mを測る。北桁行と東梁行を基準とした建物の面積は、19.99m²である。また、東梁行を基準とした棟軸方向は、N19°30'Eを示す。なお、各柱穴間の距離等は第14表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、P5の20cmを除いては、30cm程度とほぼ一定している。また、検出面からの深さは15cm～53cmと、その差が顕著であるが、多くは30cm前後である。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。この他、P12の底部には上面が平坦な石が置かれていたが、柱痕との関係を把握することはできなかった。



第63図 SB12の位置



なお、各柱穴の規模は第14表の通りである。

出土遺物

土師器・備前焼・瓦質土器が出土している。

土師器

皿と椀が出土している。

皿

P 8から17が出土している(図版1)。内外面とも磨滅が著しいが、皿Aに分類されるものと考えられる。この他、P 3の底部から体部片が出土している。皿Aに分類されるものと考えられる。

椀

P 7から18が出土している(図版1)。底部を中心に残存するが、内外面とも磨滅が著しい。その形態から、椀Aに分類されるものと考えられる。

備前焼

擂鉢と甕が出土している。

擂鉢

P 11から19が出土している(図版1)。底部から体部にかけて残存する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられているが、粘土紐痕が顕著に認められる。また、底部はナデ調

第14表 S B 12 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離(m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
西梁行	P 1 - P 5	2.30	4.60	2.30	P 1	31	-	31
	P 5 - P 9	2.30			P 2	25	-	33
北桁行	P 1 - P 2	1.50	4.65	1.55	P 3	29	-	53
	P 2 - P 3	1.45			P 4	25	-	22
東梁行	P 3 - P 4	1.70	4.30	2.15	P 5	20	-	25
	P 4 - P 8	2.05			P 6	32	-	27
南桁行	P 8 - P 12	2.25	4.60	1.53	P 7	32	-	29
	P 9 - P 10	1.45			P 8	35	-	30
	P 10 - P 11	1.45			P 9	26	-	20
	P 11 - P 12	1.70			P 10	30	-	24
					P 11	32	-	15
					P 12	27	-	31

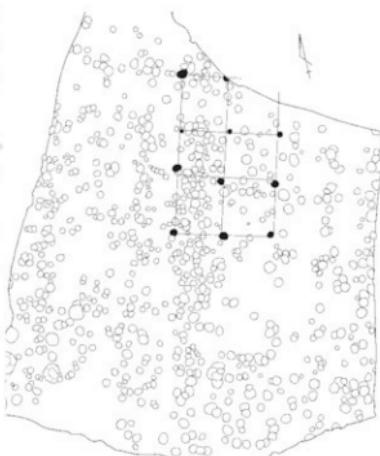
整により仕上げられている。内面には、放射状とこれに直交する鉄し目が認められるとともに、底部付近には使用痕が認められる。

甕 P 8 から体部片が出土している。

須恵質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。

瓦質土器 P 11から壠の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。



SB 13

第65図 SB 13の位置

検出状況 II - 1 区建物群で検出した（第59図）。建物群の北側に位置する。建物の北東隅は調査区外にあたり、検出できなかった（第65図）。

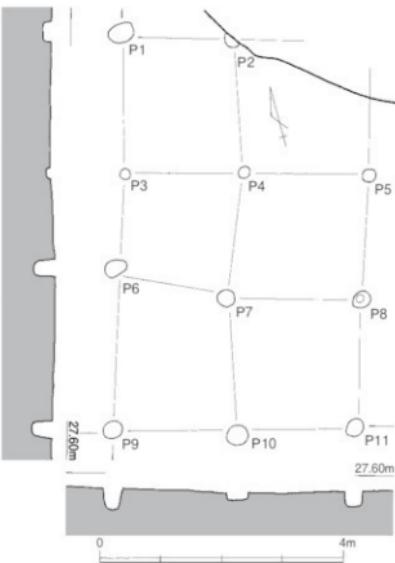
建物 南北方向に桁行をとる 2 間 ×

3 間の總柱建物である（第66図）。

建物の平面形は比較的整った長方形をなすが、中央部の桁行（P 2 - P 10）の柱通りが不揃いである。また、東西の桁行で、柱穴間の距離が異なる。建物の規模は、西桁行（P 1 - P 9）で 6.50m、南梁行（P 9 - P 11）で 3.95m を測る。西桁行と南梁行を基準とした建物の面積は、25.67 m² である。また、東梁行を基準とした棟軸方向は、N 15° E を示す。

なお、各柱穴間の距離等は第 15 表の通りである。

柱穴 柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。柱穴の規模は、P 3 の 15cm を除いては、30 cm 前後とはば一定している。ま



第66図 SB 13

第15表 SB13 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
西桁行	P 1 - P 3	2.30	6.50	2.17	P 1	33	-	18
	P 3 - P 6	1.55			P 2	27	-	38
	P 6 - P 9	2.65			P 3	15	-	10
南梁行	P 9 - P 10	2.05	3.95	1.98	P 4	20	-	18
	P 10 - P 11	1.90			P 5	22	-	13

た、検出面からの深さは10cm~38cmと、一定していない。P 8で柱痕を検出した以外は、いずれの柱穴においても柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第15表の通りである。

出土遺物

土師器

P 6とP 9から皿が出土している(図版1)。P 6からは、21が出土している。底部はへラにより切り離され、皿Abに分類されるものである。P 9からは20が出土している。内外面とも磨滅が著しいが、21と同様の特徴であることから、皿Aと考えられる。

備前焼

P 6から鉢形と壺の体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期

出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。

SB14

検出状況

II-1区建物群で検出した(第59図)。建物群の中央部西側に位置する。後世の搅乱を受けず、建物全体が検出されている(第67図)。

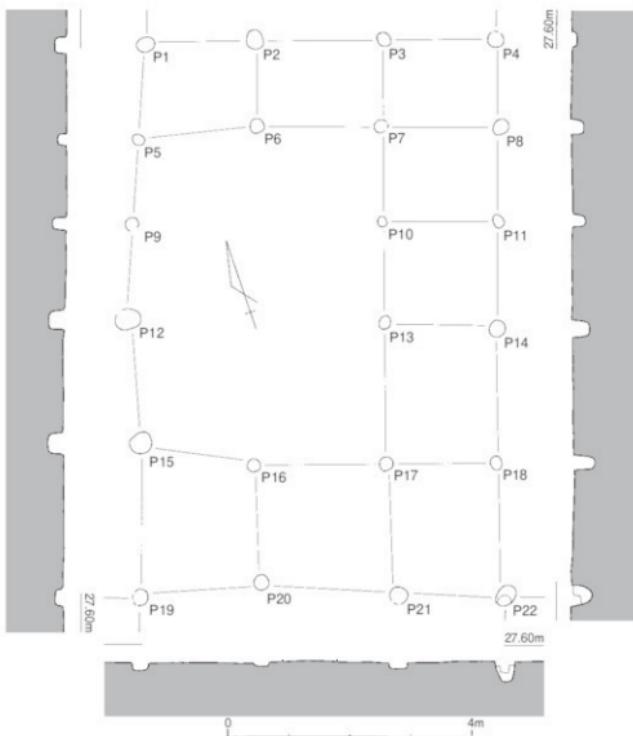
建物

南北方向に桁行をとる3間×5間の総柱建物である(第68図)。ただし、P 6-P 16間の2穴に関しては、対応する柱穴は存在しない。建物の平面形は比較的整った長方形をなすが、西桁行(P 1-P 19)の柱通りが不規則である。また、南梁行についても、やや良好ではない。また、東西の桁行とも、最も南側の柱間(P 15-P 19・P 18-P 22)が広い傾向にある。

建物の規模は、東桁行(P 4



第67図 SB14の位置



第68図 S B 14

- P 22) で 9.25m、北梁行 (P 1 - P 4) で 5.80m

を測り、両者を基準とした建物の平面積は、53.65

m²と大型である。また、東桁行を基準とした棟軸
方向は、N18° E を示す。

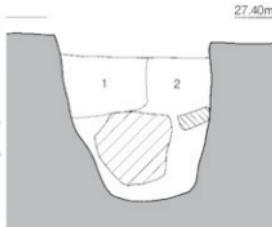
なお、各柱穴間の距離等は第16表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。

柱穴の規模は、全体的に小規模なものが目立ち、
検出面からの深さも 10cm～20cm 大と、浅い傾向に
ある。特に建物内部に柱について、その傾向が顕
著である。

P 22 で柱痕を検出した以外は、いずれの柱穴に
おいて柱痕を検出・確認することはできなかった。



1. 暗灰色シルト質粘土砂
2. 黄灰色粘土砂～細砂
0 40cm
第69図 S B 14-P 22断面

第16表 S B 14 建物・柱穴規格一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P 1 - P 2	1.85	5.80	1.93	P 1	29	-	19
	P 2 - P 3	2.10			P 2	30	-	24
	P 3 - P 4	1.85			P 3	23	-	12
東桁行	P 4 - P 8	1.45	9.25	1.85	P 4	26	-	5
	P 8 - P 11	1.55			P 5	20	-	14
	P 11 - P 14	1.75			P 6	26	-	29
	P 14 - P 18	2.20			P 7	20	-	27
	P 18 - P 22	2.30			P 8	27	-	20
南梁行	P 19 - P 20	2.00	6.00	2.00	P 9	21	-	23
	P 20 - P 21	2.25			P 10	16	-	10
	P 21 - P 22	1.75			P 11	17	-	23
西桁行	P 1 - P 5	1.55	9.10	1.82	P 12	35	-	22
	P 5 - P 9	1.40			P 13	18	-	9
	P 9 - P 12	1.55			P 14	30	-	26
	P 12 - P 15	2.05			P 15	36	-	23
	P 15 - P 19	2.55			P 16	21	-	10
					P 17	23	-	15
					P 18	18	-	23
					P 19	30	-	16
					P 20	25	-	8
					P 21	30	-	12
					P 22	30	18	37

また、P 22においては、柱穴内に窯を置いた後、柱を建てている様子を観察することができた（第69図）。

なお、各柱穴の規模は第16表の通りである。

出土遺物

土師器と備前焼が出土している。

土師器

P 2 から皿の底部から体部にかけての小片が出土している。底部はヘラにより切り離されており、皿Abに分類されるものと考えられる。ただし、小片のため図化できなかった。

備前焼

甕と盃が出土している。

甕

P 12から口縁部片（22）が、P 2・P 8・P 11～P 13・P 22から体部片が出土している。22（国版1）は口縁部のみ残存し、端部は玉縁状に折り曲げられている。体部片については、小片のため図化できなかった。P 13から出土した体部片は、須恵質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。

盃

P 14から肩部片が出土している。外面には波状文が施文されている。須恵質に焼き上げられている。

時期

出土遺物から判断して、前半期（14世紀中頃～後半）と考えられる。

S B 15 (モノクロ図版12～14・62)

検出状況

II-1区建物群で検出した（第59図）。建物群の中央部に位置する。後世の搅乱を受けず、建物全体が検出されている（第70図）。

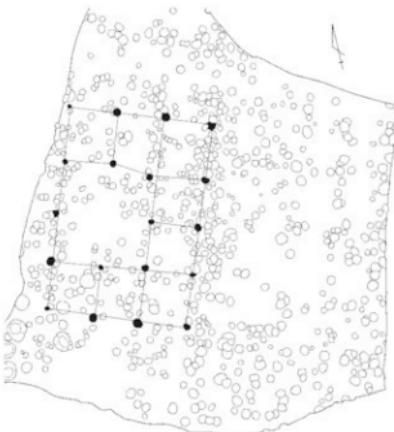
建物

南北方向に桁行をとる3間×4間の純柱建物である（第71図）。ただし、P 9～P 10間の1穴に関しては、対応する柱穴は存在しない。建物の平面形は比較的整った長方形をなし、

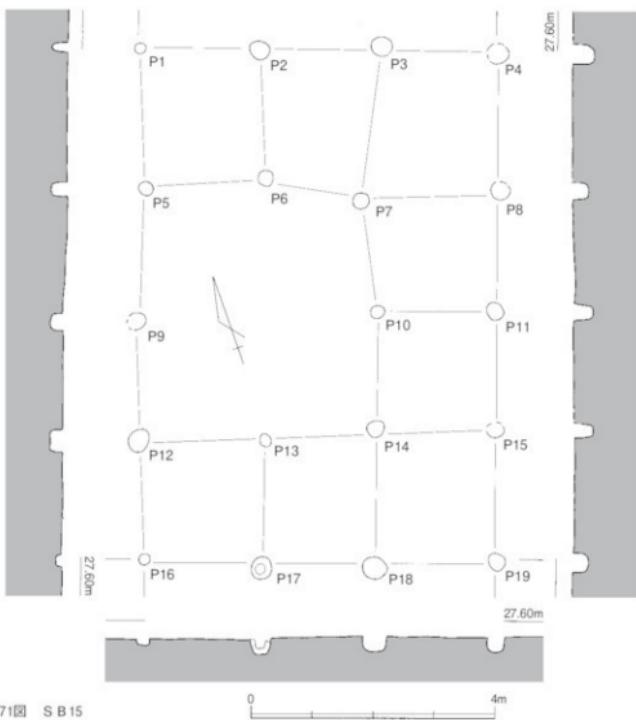
東西の桁行・南北の梁行ともにはほぼ同規模である。ただし、西桁行（P1-P16）の柱通りがやや不揃いである。また、建物内部の柱通りについては、全体的に不揃いである。

建物の規模は、東桁行（P4-P19）で8.25m、南梁行（P16-P19）で5.80mを測り、両者を基準とした建物の平面積は、47.85m²である。また、東桁行を基準とした棟軸方向は、N19°Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第17表の通りである。



第70図 S B15の位置



第71図 S B15

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を  27.40m

呈する。柱穴の規模は、38cm以下と全体的に小規模なものが目立つ。検出面からの深さも、最深部で37cmと浅い傾向にある。

P17で柱痕を検出した以外は、いずれの柱穴においても柱痕を検出・確認することはできなかった。また、同じくP17においては、柱穴内に礫を置いた後、柱を建てている様子を観察することができた(第72図)。

なお、各柱穴の規模は第17表の通りである。

出土遺物 土器と銅鉢が出土している。

土器 土師器と備前焼が出土している(図版1)。

土師器 梶と皿が出土している。特に、圓化した皿(26~35)は、P12から一括して出土している(写真図版6)。

楕 P5から2個体(24・25)出土している。2個体とも、底部が回転糸切りにより切り離され、楕Aaに分類されるものである。なお、25の底部の一部に、板目状の圧痕が認められる。

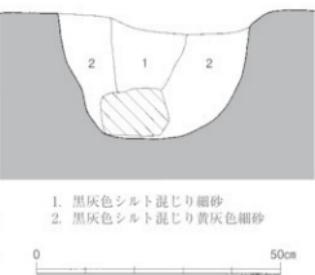
皿 P12から出土した10個体(26~35)は、全て底部がヘラ切りにより切り離され、皿Abに分類されるものである。いずれも、ヘラ切り後は、ナデ調整が加えられている。法量・形態とも同じ特徴を有している。

この他、P3から、口縁部片が出土している。手づくね成形によるもので、皿Bに分類されるものと考えられる。法量的に浅い特徴が認められる。

備前焼 揃鉢・甕・壺が出土している。

第17表 SB15 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	舞面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P1-P2	1.95	5.85	1.95	P1	18	-	27
	P2-P3	2.00			P2	33	-	36
	P3-P4	1.90			P3	34	-	27
東桁行	P4-P8	2.25	8.25	2.06	P4	38	-	37
	P8-P11	1.95			P5	24	-	27
	P11-P15	1.90			P6	25	-	15
	P15-P19	2.15			P7	25	-	25
南梁行	P16-P17	1.90	5.80	1.93	P8	31	-	23
	P17-P18	1.90			P9	27	-	21
	P18-P19	2.00			P10	23	-	26
西桁行	P1-P5	2.30	8.30	2.08	P11	26	-	34
	P5-P9	2.20			P12	32	-	18
	P9-P12	1.90			P13	17	-	20
	P12-P16	1.90			P14	30	-	23
					P15	27	-	27
					P16	19	-	10
					P17	32	15	33
					P18	36	-	24
					P19	26	-	21



1. 黒灰色シルト混じり細砂
2. 黒灰色シルト混じり黄灰色細砂

第72図 SB15-P17断面

擂鉢 P 12から1個体(23)出土している。口縁部から体部にかけて残存し、口縁部は上方に大きく引き延ばされている。口縁部外面から体部内面にかけては回転ナデ調整により仕上げられ、体部外面はユビオサエ後回転ナデ調整により仕上げられている。内面には鉗し目が認められ、使用痕が顕著である。

甕 P 18から体部片が出土している。須恵質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。

壺 P 11から体部片が出土している。肩部には、波状文が認められる。

銅鏡 M20の1点が出土している(図版35)。
時期 出土遺物から判断して、後半期と考えられる。

S B 16

検出状況 II-1区建物群で検出した(第59図)。建物群の西部に位置する。多くは調査区西側へ拡がっており、検出できたのは全体の1/2以下と考えられる。

建 物 南北方向に桁行をとる、桁行5間の建物である(第74図)。検出できたのは東桁行に限られ、梁行については1間検出したにとどまる。他の掘立柱建物同様、純柱建物の可能性が高い。東桁行の柱通りは比較的良好である。

建物の規模は、東桁行(P 1-P 6)で8.45mを測り、これを基準とした棟軸方向は、N20°Eを示す。

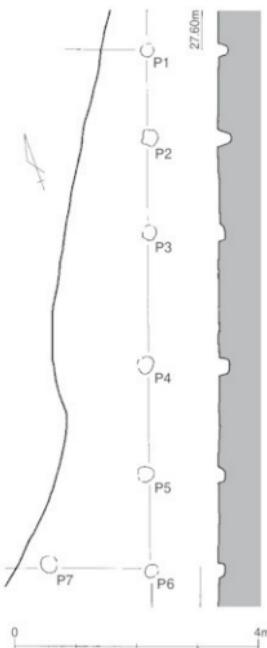
なお、各柱穴間の距離等は第18表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。柱穴の規模は、20cm大と全体的に小規模である。検出面からの深さも最深で24cmと浅い傾向にある。いずれの柱穴においても柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第18表の通りである。



第73図 S B 16の位置



第74図 S B 16

第18表 SB16 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No.	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
東桁行	P 1 - P 2	1.40	8.45	1.69	P 1	22	-	17
	P 2 - P 3	1.55			P 2	25	-	27
	P 3 - P 4	2.15			P 3	25	-	12
	P 4 - P 5	1.75			P 4	27	-	22
	P 5 - P 6	1.60			P 5	26	-	10
南梁行	P 6 - P 7	1.70	1.70	1.70	P 6	18	-	11
					P 7	28	-	24

出土遺物 P 7 から備前焼窯の骨片が出土している。外面はハケ調整により仕上げられ、赤褐色なす。ただし、小片のため同化できなかった。

時期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

SB17（カラー図版15）

検出状況 II - I 区建物群で検出した（第59図）。建物群中央に位置する。後世の擾乱等の影響を受けず、全体が検出されている。

建物 南北方向に桁行をとる、桁行3間・梁行2間の純柱建物である（第77図）。建物全体を検出できたが、建物内のP 2 - P 7 間の柱穴1穴は認められない。北梁行と西桁行の柱通りが良好ではなく、建物全体がやや歪んだ形状をなしている。

建物の規模は、東桁行（P 3 - P 11）で5.30m、南梁行（P 9 - P 11）で3.10mを測り、両者を

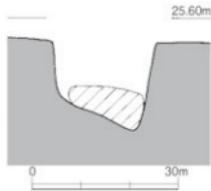
基準とした建物の面積は、16.43m²である。また東桁行を基準とした棟軸方向は、N18° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第19表の通りである。

柱穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、30cmを超えるものはP 3とP 9に限られ、全体的に小規模である。検出面からの深さは、P 11が73cmと極端に深いが、他は30cmを超えるものはP 4の1穴のみである。いずれの柱穴においても柱痕を検出・確認することはできなかった。この他、P 10においては、柱穴底部に平坦面を有する跡が置かれていたが、柱痕との関係を観察すること



第75図 SB17の位置



第76図 SB17-P10断面

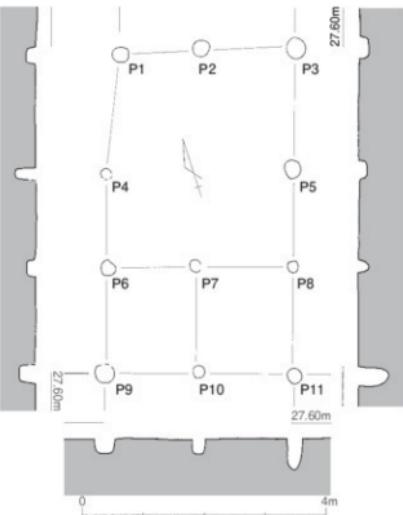
はできなかった（第76図）。

なお、各柱穴の規模は第19表の通りである。

出土遺物 P 11から瀬戸美濃焼の盤（36）が出土している（図版1）。口縁部を中心に残存し、内面に断面鉢形の突帯が付く。内外面とも釉がかけられているが、内面の下端は露胎している。釉には貫入が認められる。

この他、小片のため図化できなかったが、P 10から備前焼の壺もしくは甕の口縁部片が出土している。端部の特徴から、IV期に位置付けられるものである。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。



第77図 SB 17

第19表 SB 17 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No.	平面規模 (cm)	柱底 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P 1 - P 2	1.35	2.90	1.45	P 1	26	-	15
	P 2 - P 3	1.55			P 2	27	-	22
東桁行	P 3 - P 5	1.95	5.30	1.77	P 3	32	-	16
	P 5 - P 8	1.55			P 4	18	-	37
南梁行	P 8 - P 11	1.80	3.10	1.55	P 5	28	-	17
	P 9 - P 10	1.55			P 6	25	-	15
西桁行	P 10 - P 11	1.55	5.20	1.73	P 7	16	-	14
	P 1 - P 4	1.95			P 8	19	-	14
	P 4 - P 6	1.55			P 9	31	-	27
	P 6 - P 9	1.70			P 10	20	-	27
					P 11	23	-	73

SB 18（モノクロ図版12・15）

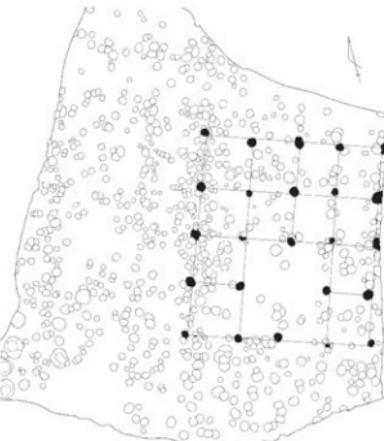
検出状況 II-1区建物群で検出した（第59図）。建物群の東部に位置する（第75図）。東桁行の一部が調査区外にあたるが、ほぼ全体が検出されている。

建 物 南北方向に桁行をとる、桁行4間・梁行4間の純柱建物である（第79図）。建物全体を検出できたが、建物内のP 17-P 18間の柱穴1穴は認められない。南梁行と東桁行の柱通りが良好ではなく、梁行・桁行それぞれの規模も異なる。また、桁行と梁行が直角関係がない。このため、建物全体がやや歪んだ形状をなしている。

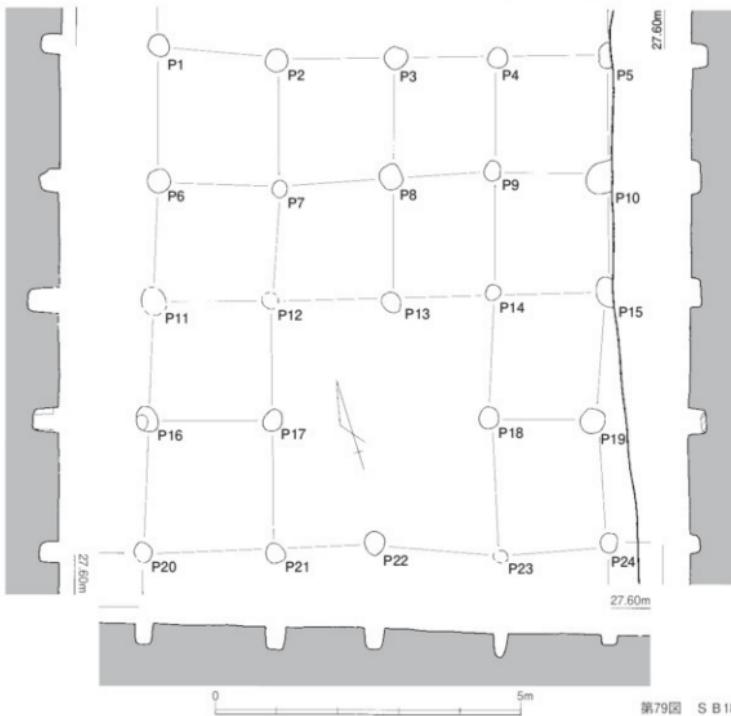
建物の規模は、東桁行（P 5 - P 24）で7.85m、南梁行（P 20 - P 24）で7.65mを測り、両者を基準とした建物の面積は、60.05 m²である。また西桁行を基準とした棟軸方向は、N17° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第20表の通りである。

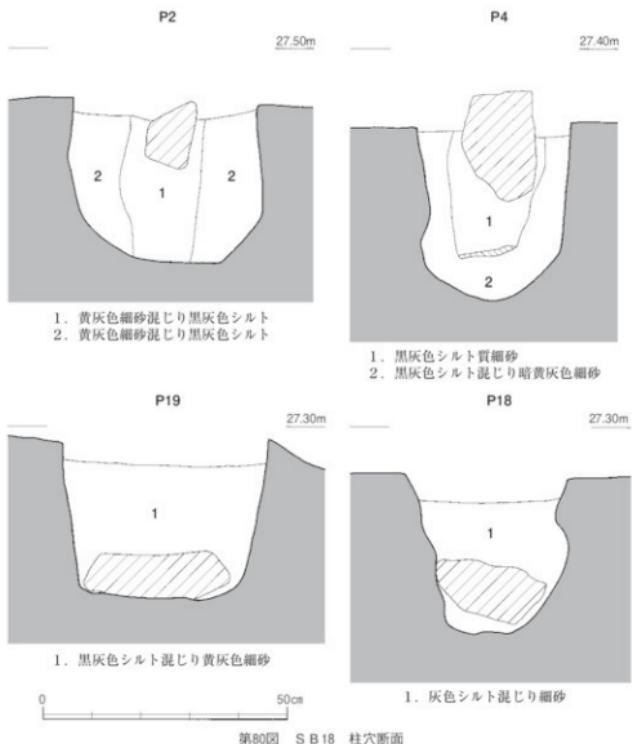
柱穴 P 5・P 10・P 15の一部は調査区外にあたり、柱穴全体が検出されていない。柱穴の平面形は、円形もしくは椭円形を呈する。柱穴の規模は、P 10がやや大規模である以外、30cm～40cmとほぼ一定している。また、検



第78図 SB 18の位置



第79図 SB 18



出面からの深さについても、30cm規模のものが多い傾向にある。P16を除いては、柱痕を検出・確認することはできなかった。

この他、P18とP19においては、柱穴底部に平坦面を有する礫が置かれていた。しかし、調査では柱痕との関係を観察することはできなかった。また、P4においては、柱穴底部に扁平な礫が置かれ、その上に柱が建てられていた様子を観察することができるとともに、柱抜き取り後に礫が埋められていた。P2においても、柱抜き取り後に礫が埋められていた（第80図）。

なお、各柱穴の規模は第20表の通りである。

出土遺物 土師器・瓦質土器・備前焼・青磁・白磁・石製品が出土している（図版1・2）。

土師器 P6から37の皿1個体が出土している。皿Bに分類されるもので、ユビオサエの後ナデ調整により仕上げられている。この他、P3から底部片が出土している。底部がヘラにより切り離され、皿Abと考えられる。さらに、P2とP10からは口縁部片が出土している。

また、P9から壠の底部～体部片が出土している。

瓦質土器 小片のため図化できなかったが、P1から壠の体部片が出土している。全体的に焼成は

不十分で、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

備前焼

鉢鉢と甕が出土している。

鉢鉢

P 11から出土している。底部から体部を中心に残存し、内面は使用痕が顕著である。

甕

P 19から口縁部片（41）が出土している。口縁部がわずかに残存するもので、端部は巻き返され、玉縁状をなす。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、須恵器に近い焼き上がりである。

この他、P 3・P 4・P 6・P 8・P 15から体部片が出土している。いずれも小片のため同化できなかった。特にP 15から出土した体部片は、焼き上がりが須恵質である。

青磁

P 16とP 17から碗が出土している。P 16からは40の1個体が出土している。口縁部から体部にかけて残存する、施文は認められない。内外面とも釉が掛けられており、貫入が認められる。P 17から出土した39は、口縁部がわずかに残存する。内外面とも釉が掛けられており、外面にはわずかに界線が認められる。

白磁

P 2から、38の1個体が出土している。口縁部を中心に残存する。内外面とも釉が掛けられているが、口縁部内端面のみ釉が削り取られている。

石製品

P 10から石硯（42）が出土している。陸部を中心に全体の約1/2が残存する。残存長は5.30cmで、幅は5.05cm、陸部中央における厚さは9.5mmを測る。縁辺部には幅5.5mmの平縁が削り出されており、陸部との比高はわずか2mmである。また、陸部上面には使用痕が顕著に認められる。

時期

出土遺物から判断して、前半期（14世紀中頃～後半）と考えられる。

第20表 S B18 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北梁行	P 1 - P 2	1.95	7.40	1.85	P 1	32	-	36
	P 2 - P 3	1.95			P 2	38	-	36
	P 3 - P 4	1.70			P 3	39	-	15
	P 4 - P 5	1.80			P 4	34	-	38
東桁行	P 5 - P 10	2.00	7.85	1.96	P 5	34	-	23
	P 10 - P 15	1.80			P 6	39	-	34
	P 15 - P 19	2.05			P 7	26	-	13
	P 19 - P 24	2.00			P 8	39	-	43
南梁行	P 20 - P 21	2.15	7.65	1.91	P 9	28	-	20
	P 21 - P 22	1.65			P 10	49	-	16
	P 22 - P 23	2.05			P 11	41	-	54
	P 23 - P 24	1.80			P 12	26	-	32
西桁行	P 1 - P 6	2.20	8.20	2.05	P 13	30	-	17
	P 6 - P 11	1.95			P 14	24	-	24
	P 11 - P 16	1.95			P 15	41	-	19
	P 16 - P 20	2.10			P 16	36	18	40
					P 17	32	-	32
					P 18	32	-	35
					P 19	40	-	32
					P 20	32	-	33
					P 21	30	-	38
					P 22	34	-	35
					P 23	24	-	40
					P 24	28	-	15

S B 19

検出状況

II - 1 区建物群で検出した（第59図）。建物群の東部に位置する。建物の大半は調査区外に抜がっており、全体を検出できたのは西桁行に限られる（第81図）。

建 物

南北方向に桁行をとる、桁行3間の複数建物である（第82図）。梁行は、1間分検出できただにどまる。桁行と梁行が直角關係なく、建物全体がやや歪んだ形状をなしている。

建物の規模は、西桁行（P 1 - P 7）で4.60mを測る。また西桁行を基準とした柱軸方向

は、N18°30'Eを示す。なお、各柱穴間の距離等は第21表の通りである。

柱 穴

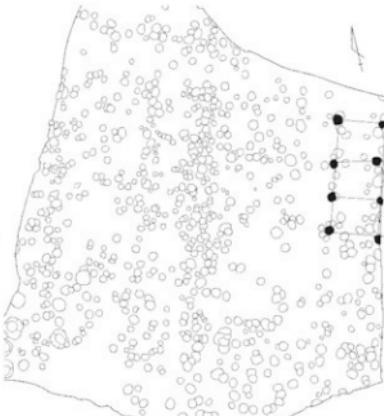
P 6 と P 8 の一部は調査区外にあたり、柱穴全体が検出されていない。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形をなす。柱穴の規模は、P 6 を除いて、30cm～40cmとほぼ一定している。また、検出面からの深さも、P 8 を除いては30cm前後でほぼ一定している。特に、西桁行柱穴の底部のレベルは全て同じである。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。各柱穴の規模は第21表の通りである。

出土遺物

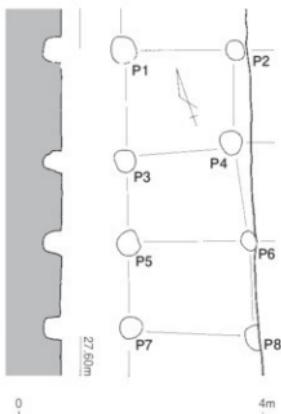
P 3 から土師器の皿が1個体（43）出土している（図版2）。底部はヘラにより切り離され、皿Abに分類される皿である。

時 期

出土遺物から判断して、後半期と考えられる。



第81図 S B 19の位置



第82図 S B 19

第21表 S B 19 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
西桁行	P 1 - P 3	1.85			P 1	40	-	31
	P 3 - P 5	1.35			P 2	32	-	24
	P 5 - P 7	1.40		4.60	P 3	31	-	29
				1.53	P 4	39	-	24
					P 5	35	-	22
					P 6	25	-	36
					P 7	35	-	24
					P 8	38	-	12

S B20

検出状況 II - I 区建物群で検出した（第59図）。建物群のはば中央部に位置する（第83図）。このため、建物全体が検出されている。

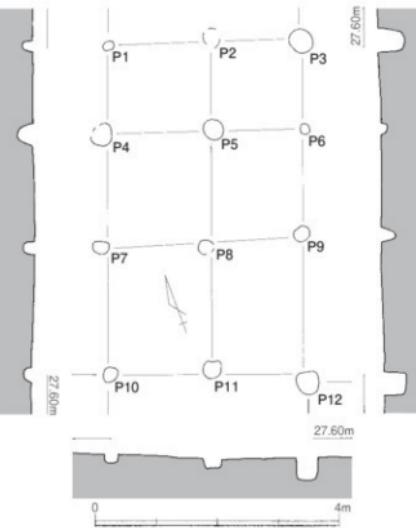
建 物 南北方向に桁行をとる、桁行3間・梁行2間の純柱建物である（第84図）。東西の桁行は平行するが、南北の梁行は平行ではなく、全体的にやや歪んだ長方形をなす。また、東西の桁行柱穴の間隔については、南側の1間分が他より広くなっている。建物の規模は、西桁行（P1-P10）で5.30m、南梁行（P10-P12）で3.25mを測り、両者を基準とした面積は17.22m²である。また西桁行を基準とした棟軸方向は、N17°Eを示す。

柱 穴 なお、各柱穴間の距離等は第22表の通りである。
柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形をなす。柱穴の規模は、P3・P4・P12以外は、小型の傾向にある。また、検出面からの深さについても、P3とP12以外は、30cmを超えず、全体的に浅い傾向にある。また、いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

この他、P5とP11の柱穴内には上面が平坦な縦が置かれていたが、柱との関係を観察することはできなかった（第85図・第86図）。



第83図 S B20の位置



第84図 S B20

その位置関係から、礎の上に柱が建てられていたものと考えられる。

なお、各柱穴の規模は第22表の通りである。

出土遺物

土師器と備前焼が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

土師器

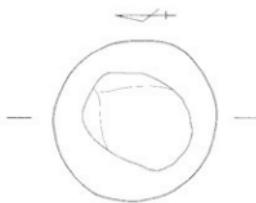
椀と皿が出土している。椀は、P10から底部片が出土しており、ヘラにより切り離されている。皿は、P12から口縁部片と底部片が出土している。底部は、ヘラにより切り離されている。

備前焼

P5から甕の体部片が出土している。全体的な仕上がりは須質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。P12からも同様の体部片が出土している。

時期

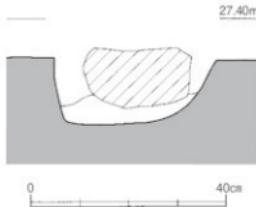
出土遺物から判断して、後半期と考えられる。



27.40m



第85図 S B20-P11断面



第86図 S B20-P5

第22表 S B20 建物・柱穴規格一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
北梁行	P1-P2	1.70	3.15	1.58
	P2-P3	1.45		
東桁行	P3-P6	1.45	5.55	1.85
	P6-P9	1.70		
南梁行	P9-P12	2.40	3.25	1.63
	P10-P11	1.70		
西桁行	P11-P12	1.55		
	P1-P4	1.45	5.30	1.77
	P4-P7	1.80		
	P7-P10	2.05		

No	平面規模 (cm)	柱直 (cm)	深さ (cm)
P1	20	-	15
P2	25	-	29
P3	37	-	41
P4	42	-	25
P5	32	-	14
P6	15	-	15
P7	21	-	18
P8	23	-	26
P9	29	-	24
P10	26	-	13
P11	29	-	17
P12	38	-	39

S B21

検出状況

II-1区建物群で検出した（第59図）。建物群のほぼ南東部に位置する。S B18の南側、S B25の北側に位置する。建物北東隅の1穴は、一部調査区外に拡がっている。基本的に建物全体が検出されているが、建物がさらに東側調査区外へ拡がる可能性も考えられる。

建物

東西方向に桁行をとる、桁行3間・梁行2間の總柱建物と考えている（第88図）。南北の桁行は平行するが、東梁行の柱通りは良好ではなく、やや歪んだ長方形をなす。また、中央部桁行の柱穴の間隔については、南側の1間分が他より狭くなっている。

建物の規模は、西梁行（P 1 – P 9）で4.05m、南桁行（P 9 – P 12）で6.05mを測り、両者を基準とした面積は24.50m²である。また西梁行を基準とした棟軸方向は、N16° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第23表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形をなす。柱穴の規模は、P 1とP 3がやや小型である以外は、30cm以上を測る。また、検出面からの深さについても、P 5とP 12が40cmを超える以外は、比較的浅い傾向にある。なお、いずれの柱穴においても、柱旗を検出・確認することはできなかった。

この他、P 8の柱穴内には上面が平坦な蹠が置かれていたが、柱との関係を観察することはできなかった（第89図）。その位置関係から、蹠の上に柱が建てられていたものと考えられる。

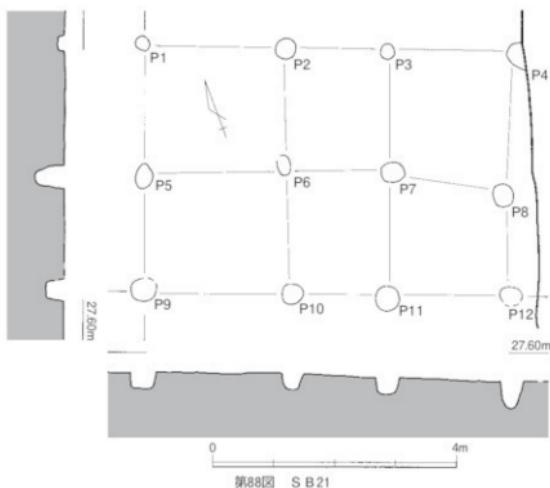
なお、各柱穴の規模は第23表の通りである。

出土遺物

土師器と備前焼が出土している。



第87図 SB21の位置



第88図 SB21

土器類

椀と皿が出土している。椀は、P 4から底部片が出土している。椀Aと考えられ、輪轍成形により造られている。ただし、小片のため固化できなかった。

皿は、P 12から1個体(44)出土している(図版2)。外面とも磨滅が著しいが、口縁部外面に回転ナデ調整痕が認められることから、皿Aと考えられる。この他、P 6・P 9・P 11からも小片が出土している。

備前焼

P 2とP 9から、甕の体部片が出土している。いずれも焼き上りは須恵質で、外面はハケ調整により仕上げられている。

時期

出土遺物から判断して、前半期と考えられる。

第23表 S B21 建物・柱穴規模一覧

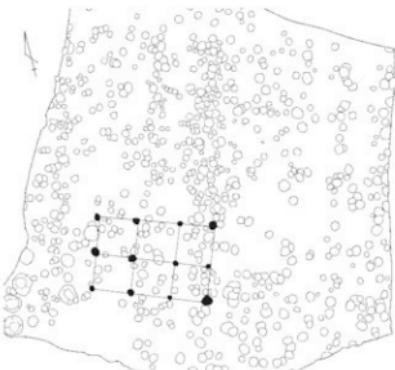
	柱間	柱穴間距離 (m)	舞面距離 (m)	柱穴間平均 距離(m)
北桁行	P 1-P 2	2.35	6.15	2.05
	P 2-P 3	1.70		
	P 3-P 4	2.10		
東梁行	P 4-P 8	2.30	3.90	1.95
	P 8-P 12	1.60		
南桁行	P 9-P 10	2.45	6.05	2.02
	P 10-P 11	1.55		
	P 11-P 12	2.05		
西梁行	P 1-P 5	2.15	4.05	2.03
	P 5-P 9	1.90		

No	平面規模 (cm)	柱直 (cm)	深さ (cm)
P 1	23	-	14
P 2	36	-	39
P 3	22	-	13
P 4	40	-	17
P 5	28	-	48
P 6	22	-	35
P 7	35	-	30
P 8	31	-	21
P 9	36	-	26
P 10	35	-	24
P 11	40	-	30
P 12	35	-	45

S B22

検出状況 II-1区建物群で検出した(第59図)。建物群のはば南東部に位置する(第90図)。S B21の西側に位置する。S B15と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物は全体が検出されている。

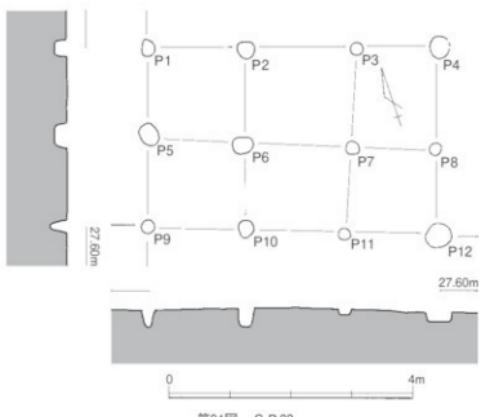
建物 東西方向に桁行をとる、桁行3間・梁行2間の純柱建物である(第91図)。桁行・梁行それ



第90図 S B22の位置



第89図 S B21-P 8



第91図 SB22

それが平行関係にあり、全体的に整った長方形をなす。ただし、中間部の桁行は、他の桁行と平行関係はない。

建物の規模は、西梁行（P 1 - P 9）で290m、北桁行・南桁行ともに480mを測り、両者を基準とした面積は13.92m²である。また西梁行を基準とした棟軸方向は、N18° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第24表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。柱穴の規模は、P 4 と P 12がやや大型である以外は、全体的に小型である。検出面からの深さについても、20cm以下の浅いものが多い傾向にある。また、いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかつた。

なお、各柱穴の規模は第24表の通りである。

出土遺物 土師器と青磁が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は皿の体部片が、青磁はP 2から碗が出土している。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

第24表 SB22 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北桁行	P 1 - P 2	1.60	4.80	1.60	P 1	22	-	12
	P 2 - P 3	1.85			P 2	30	-	23
	P 3 - P 4	1.35			P 3	22	-	21
東梁行	P 4 - P 8	1.55	3.00	1.50	P 4	32	-	10
	P 8 - P 12	1.45			P 5	31	-	23
南桁行	P 9 - P 10	1.65	4.80	1.60	P 6	26	-	13
	P 10 - P 11	1.60			P 7	22	-	33
	P 11 - P 12	1.55			P 8	20	-	19
西梁行	P 1 - P 5	1.40	2.90	1.45	P 9	22	-	32
	P 5 - P 9	1.50			P 10	25	-	35
					P 11	23	-	12
					P 12	43	-	13

S B23

検出状況

II - I 区建物群で検出した（第59図）。建物群のはば南東部に位置する（第92図）。S B19の南側に位置する。建物の大半が調査区外に拡がり、建物の規模等の全容を明らかにすることはできない。

建 物

南北方向に桁行をとる総柱建物と考えられる（第93図）。ただし、検出できたのは西桁の4穴に限られ、桁行・梁行の規模を明らかにすることはできない。桁行についても、さらに拡がる可能性も考えられる。西桁行を基準とした棟軸方向は、N 16° Eを示す。



第92図 S B23の位置

なお、各柱穴間の距離等は第25表の通りである。

柱 穴

検出できたのは4穴に限られる。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。4穴ともその規模が30cm以上と比較的大型で、一定している。また、柱穴底部の標高も26.8mと同レベルである。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。なお、各柱穴の規模は第25表の通りである。

出土遺物

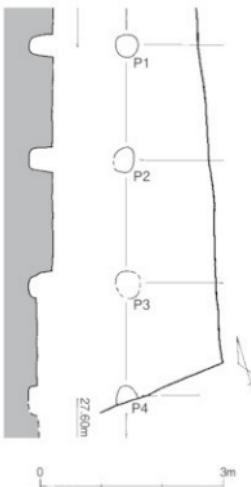
備前焼の鉢と壺が出土している。

鉢はP 2から出土した45の1点である（図版2）。口縁部を中心に残存する小片で、内端部が上方につまみあげられている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。内面には卸し目がわずかに認められ、体部には使用痕が認められる。

壺は、P 3から体部片が出土している。外面はハケ調整により仕上げられ、須恵質に焼き上げられている。

時 期

出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。



第93図 S B23

第25表 S B23 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
西桁行	P 1 - P 2	1.90	5.70	1.90	P 1	38	-	39
	P 2 - P 3	2.00			P 2	33	-	40
	P 3 - P 4	1.80			P 3	41	-	38
					P 4	35	-	15

S B24

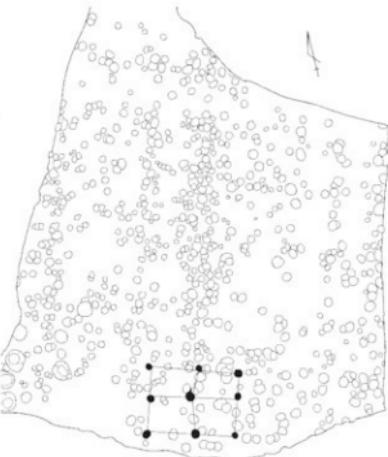
検出状況

II - 1 区建物群で検出した(第59図)。建物群の南部に位置する(第94図)。S B20の南側、旧河道の北側に位置する。建物の南側については旧河道の肩部と近接している。建物がさらに南側まで拡がっていた可能性も考えられるが、旧河道の肩のラインと建物南桁行のラインがほぼ平行することなどから、その可能性は低いものと考えられる。このため、建物全体が検出されたものと考えている。

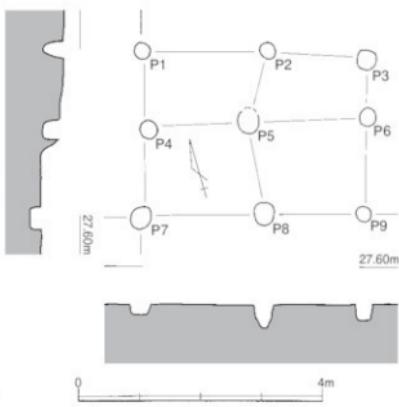
建 物

東西方向に桁行をとる、2間×2間の純柱建物である(第95図)。東西の梁行は平行し、同規模であるのに対し、桁行については平行していない。このため、全体的にやや歪んだ平面形をなしている。さらに、建物中央の柱の位置がややずれており、中央梁行の柱通りが歪んでいる。

建物の規模は、西桁行(P 1 - P 7)で2.65m、南桁行(P 7 - P 9)で3.65mを測り、両者を基準とした建物の面積は9.67m²と、大変小型である。また、西桁行を基準とした棟軸方向は、N 16° Eを示す。



第94図 S B24の位置



第95図 S B24

なお、各柱穴間の距離等は第26表の通りである。

柱穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。その規模は25cm~38cmと比較的同規模である。一方、柱穴の深さについては、16cm~48cmと、その差が顕著である。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第26表の通りである。

出土遺物 土師器と備前焼が出土している（図版2・3）。

土師器 盆と壺が出土している。

皿 P 8から皿が3個体（46~48）出土している（図版2）。46と47は、皿Abに分類されるものであるが、形態的特徴を異にする。48も皿Aに分類されるものであるが、底部まで残存しないため、その切り離し方法は不明である。ただし、形態的特徴は、46・47とは異なる。

この他、P 2から底部片が、P 6から口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺 P 6から体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面は叩き整形により仕上げられ、煤が付着している。

備前焼 掃鉢・壺・甕が出土している。

掃鉢 P 8から口縁部の小片（49）が出土している。口縁部内端部が上方につまみあげられ、外端部もわずかに肥厚する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内面に横ナデ調整が加えられている。内面には卸し目がわずかに残存し、体部付近には使用痕が認められる。

甕 P 5から小甕が1点（106）出土している。口縁部を中心に残存し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。口縁部内面と外面の一部に自然釉が付着している。

甕 P 8とP 9から、体部の小片が出土している。

時期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

第26表 S B24 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
北桁行	P 1 - P 2	2.05	3.65	1.83	P 1	26	-	32
	P 2 - P 3	1.60			P 2	27	-	16
東梁行	P 3 - P 6	0.90	2.50	1.25	P 3	32	-	48
	P 6 - P 9	1.60			P 4	30	-	26
南桁行	P 7 - P 8	2.00	3.65	1.83	P 5	38	-	21
	P 8 - P 9	1.65			P 6	27	-	22
西梁行	P 1 - P 4	1.25	2.65	1.33	P 7	33	-	16
	P 4 - P 7	1.40			P 8	34	-	36
					P 9	25	-	33

S B25

検出状況 II-1区建物群で検出した（第59図）。建物群のはば南東部に位置する（第96図）。S B21の南側、旧河道の北側に位置する。建物の規模から判断して、さらに南側まで拡がっていた可能性が考えられる。東側については、さらに拡がる可能性も否定できないが、規模

から判断して、調査区内で収束しているものと考えている。

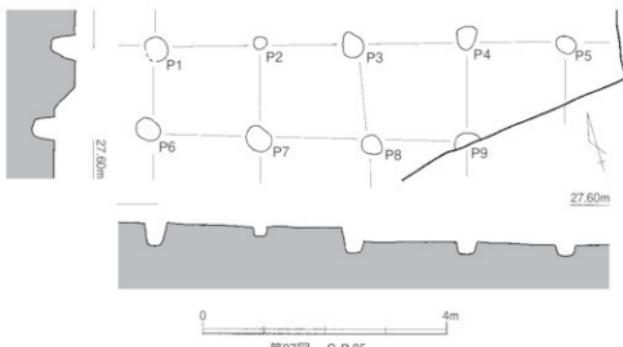
建 物 東西方向に桁行をとる、桁行4間の総柱建物である(第97図)。梁行については、1間分を検出したにとどまる。建物の規模は、北桁行(P1-P5)で670mを測る。また、西梁行を基準とした棟軸方向は、N16°Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第27表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。その規模は、P2を除いては30cm以上と比較的大型である。一方、柱穴の深



第96図 SB 25の位置



第97図 SB 25

さについては、P2・P5のように浅いものから、P9のように深いものまで、その差が顕著である。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。また、P7の柱穴底部には上面が扁平な石が置かれていたが、柱との関係を明らかにすることはできなかった。なお、各柱穴の規模は第27表の通りである。

出土遺物 土師器と備前焼が出土している。

土師器 P1から皿が1個体(50)出土している(図版2)。底部がヘラにより切り離され、皿Abに分類されるものである。この他、P7からも皿の口縁部片が出土している。

備前焼 P6から甕が出土している。体部の小片で、赤灰色をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。

時 期 出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。

第27表 S B25 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
北桁行	P 1 - P 2	1.70		6.70 1.68
	P 2 - P 3	1.50		
	P 3 - P 4	1.85		
	P 4 - P 5	1.65		

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	35	-	33
P 2	22	-	12
P 3	35	-	35
P 4	31	-	40
P 5	30	-	13
P 6	35	-	36
P 7	38	-	33
P 8	31	-	22
P 9	42	-	47

S B26

検出状況

II - 1 区建物群で検出した (第59図)。建物群の北部に位置する (第98図)。S B17の北側に位置する。建物の多くは調査区外に拡がっており、検出できたのは約1/2以下と考えられる。

建 物

多くが調査区外へ拡がっているため、建物の規模等を明確にすることはできない。他の建物の構造から判断して、2間以上からなる純柱建物と考えられる (第99図)。桁行・梁行方向については明確にできないが、柱穴間距離から判断して、南北方向が桁行の可能性が高い。建物西側と南側は直角ではなく、全体的にやや歪んだ形となっている。建物南側 (P 3 - P 5) の直角方向を基準とした棟軸方向は、N 16° Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第28表の通りである。

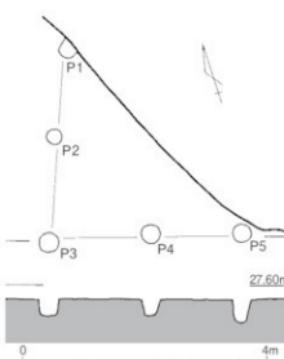
柱 穴

柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。その規模は、P 2 を除いては30cm大と一定している。比較的大型である。柱穴の深さについては、その底部のレベルが27.00m - 27.10mと一定している。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第28表の通りである。



第98図 S B26の位置



第99図 S B26

第28表 S B26 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
西側	P 1 - P 2	1.40	3.10	1.55	P 1	30	-	32
	P 2 - P 3	1.70			P 2	24	-	14
南側	P 3 - P 4	1.65	3.15	1.58	P 3	32	-	26
	P 4 - P 5	1.50			P 4	30	-	23
					P 5	30	-	35

出土遺物

全く出土していない。

時 期

出土遺物から時期の特定は困難である。他の建物との位置関係等から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

S B27

検出状況

II - 1 区建物群で検出した（第59図）。建物群の中央西端部に位置する（第100図）。S B20の西側に位置する。建物の西側については調査区外に拡がる可能性も考えられる。

建 物

南北方向に桁行をとる、梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である（第101図）。ただし、梁行については、さらに西側に拡がる可能性も考えられる。総柱建物であるが、北東隅の1穴とP 6 - P 7間の1穴を欠く。

建物の平面形は、比較的整った形をなす。建物の規模は、西側桁行（P 1 - P 8）で5.05m、

南梁行（P 8 - P 10）で3.35mを測る。また、両者を基準とした建物の面積は、16.92m²で



第100図 S B27の位置

第29表 S B27 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)	No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
桁行	P 1 - P 3	1.85	5.05	1.68	P 1	35	-	17
	P 3 - P 6	1.40			P 2	23	-	17
	P 6 - P 8	1.80			P 3	21	-	24
南梁行	P 8 - P 9	1.60	3.35	1.68	P 4	23	-	21
	P 9 - P 10	1.75			P 5	20	-	16
					P 6	24	-	49
					P 7	27	-	25
					P 8	32	-	14
					P 9	27	-	22
					P 10	22	-	22

ある。西側桁行（P 1 - P 8）を基準とした棟軸方向は、N24°Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第29表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。全体的に、その規模は20cm大と比較的一定している。一方、深さについては、P 6を除いては20cm大以下と全体的に浅い傾向にある。また、いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

なお、各柱穴の規模は第29表の通りである。

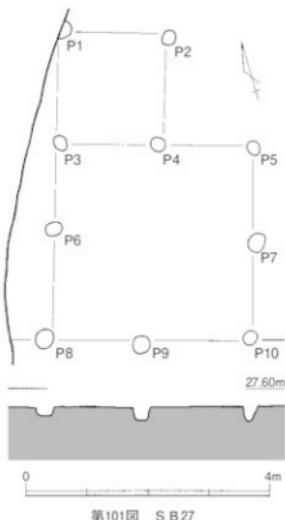
出土遺物 P 6から土師器・備前焼・瓦質土器が出土している。土師器は、壇の底部片が出土しており、外面は叩き整形後ナダ調整により仕上げられている。備前焼は、部体の小片が出土している。瓦質土器は、壇の体部片が出土しており、内面はハケ調整により仕上げられている。いずれも小片のため図化できなかった。

時 期 出土遺物から判断して、後半期（15世紀）と考えられる。

S B28

検出状況 II - I 区建物群で検出した（第59図）。建物群の中央西端部に位置する（第102図）。建物の西側については、調査区外に抜がる可能性も考えられる。

建 物 南北方向に桁行をとる、梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である（第103図）。ただし、梁行については、さらに西側に抜がる可能性も考えられる。また、P 3 - P 7間の1穴を欠く。建物の平面形は、比較的整った形をなす。その規模は、東桁行（P 2 - P 8）で4.00m、南梁行（P 6 - P 8）で3.20mを測る。また、両者を基準とした建物の面積は、12.80m²である。東桁行



第101図 S B27



第102図 S B28の位置

(P 2 - P 8) を基準とした棟軸方向は、N19°30' Eを示す。

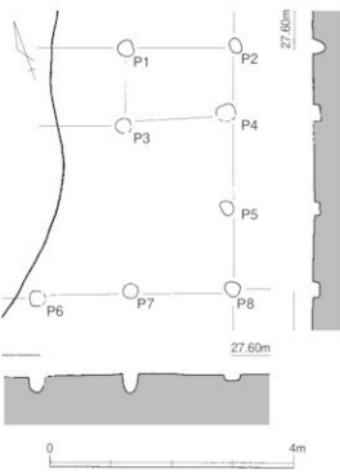
なお、各柱穴間の距離等は第30表の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈する。その規模はP 4除いては20cm大と一定している。一方、深さについては、全体的に浅い傾向にある。

また、いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。なお、各柱穴の規模は第30表の通りである。

出土遺物 P 4から備前焼擂鉢の体部片が出土している。

時 期 出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。



第103図 S B28

第30表 S B28 建物・柱穴規模一覧

	柱 間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離 (m)
東桁行	P 2 - P 4	1.10	4.00	1.33
	P 4 - P 5	1.55		
	P 5 - P 8	1.35		
南梁行	P 6 - P 7	1.50	3.20	1.60
	P 7 - P 8	1.70		

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	-	19
P 2	20	-	22
P 3	25	-	18
P 4	32	-	12
P 5	23	-	12
P 6	27	-	24
P 7	26	-	31
P 8	25	-	12

S B29 (モノクロ図版15)

カラー図版15)

検出状況 II-1区建物群で検出した(第59図)。建物群の南西部に位置する(第104図)。S B24の北西側に位置する。

建 物 南北方向に桁行をとる、梁行2間、桁行3間からなる矩柱建物である(第105図)。ただし、南梁行の1穴を欠く。

建物の平面形は、桁行・梁行それぞれが平行し、整った長方形をなす。建物の規模は、西桁



第104図 S B29の位置

行(P1-P10)で4.65m、北梁行(P1-P3)で3.45mを測る。

また、両者を基準とした建物の面積は、16.04m²である。西桁行(P1-P10)を基準とした棟軸方向は、N17°Eを示す。

なお、各柱穴間の距離等は第31表の通りである。

柱穴

柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形をなす。全体的に、30cm以下と一定している。また、深さについては、12cmから46cmとその差が著しい。

ただし、底部の標高は、多くが27.00m～27.10mとほぼ一定している。

ただし、いずれの柱穴においても、

柱旗の検出・確認はできなかった。なお、各柱穴の規模は第31表の通りである。

出土遺物

土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼が出土している。

土師器

皿は、P8から1個体(51)出土している(図版2)。皿Abに分類されるものであるが、口径10.75cmとやや大型である。底部はヘラ切り痕とともに工具痕も認められる(モノクロ図版15)。また、内面には仕上げナデが認められる。他に、P4からも口縁部片が出土している。

椀は、P10から底部片が出土している。底部の切り離しは、回転ヘラ切りによるもので、椀Abに分類されるものである。他に、口縁部片も出土している。いずれも小片のため同化できなかった。

瓦質土器

P3から壺と考えられる小片が出土している。

瀬戸美濃焼

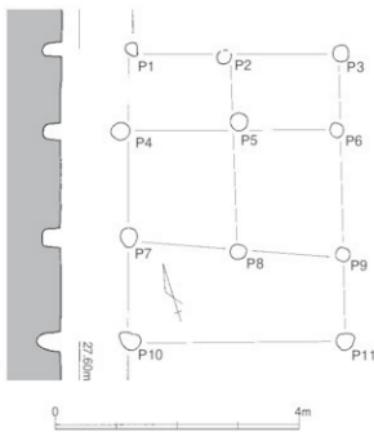
P7から碗の口縁部片(52)が出土している(図版2)。体部外面の一部を除いては、外側とも釉が掛けられている(カラー図版15)。

時期

出土遺物から判断して、後半期(15世紀)と考えられる。

第31表 S B29 建物・柱穴規模一覧

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均 距離(m)
北梁行	P1-P2	1.55	3.45	1.73
	P2-P3	1.90		
東桁行	P3-P6	1.20	4.60	1.53
	P6-P9	2.00		
	P9-P11	1.40		
西桁行	P1-P4	1.30	4.65	1.55
	P4-P7	1.70		
	P7-P10	1.65		



第105図 S B29

No	平面規模 (cm)	柱底 (cm)	深さ (cm)
P1	20	-	20
P2	25	-	13
P3	28	-	21
P4	31	-	28
P5	29	-	12
P6	23	-	13
P7	26	-	28
P8	25	-	32
P9	25	-	35
P10	30	-	33
P11	26	-	46

S B30

検出状況 II - I 区建物群で検出した（第59図）。建物群の南東部に位置する（第106図）。S B19の南側に位置する。

建 物 検出できたのは、南北方向に直列する3穴に限られる。このため、建物の規模等は明確にできない。柱穴間の距離から判断して、この3穴は平行となる可能性が高いものと考えられる。柱穴間の距離は、P 1 - P 2 間が2.90m、P 2 - P 3 間が2.10mを測る。西平行（P 1 - P 3）を基準とした棟軸方向は、N 17°30' E を示す。

柱 穴 柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈する。いずれの柱穴においても、柱痕を検出・確認することはできなかった。

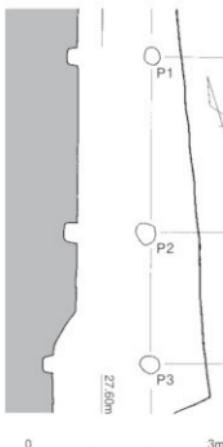
なお、各柱穴の規模は第32表の通りである。

出土遺物 P 3 から備前焼鉢が1個体（121）出土している（図版3）。小片ではあるが、口縁部から底部まで残存する。また、図化できなかったが、片口の一部も残存する。口縁端部は体部に対して直交する回転ナデ調整により仕上げられ、口縁端部はコ字形に近い。また、体部下端外面はヘラ削りにより仕上げられ、その後ナデ調整が加えられている。底部外面はヘラナデ調整により仕上げられている。内面には、6本を単位とする鉢し目が2単位認められる。体部内面には使用痕が認められる。

時 期 出土遺物から判断して、前半（14世紀中頃～後半）と考えられる。



第106図 S B30の位置



第107図 S B30

第32表 S B30 柱穴規模一覧

No	平面規模 (cm)	柱痕 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	-	15
P 2	30	-	20
P 3	29	-	15

2. 柱穴

はじめに

建物を構成すると認められた柱穴以外に、多くの柱穴が検出されている。これらの柱穴の中には、遺物が良好な状態で出土した例が認められる。そこで、このような良好な遺物が得られた柱穴について、出土遺物を中心に報告する。報告する柱穴は、64穴（P01～P64）である（第109図・110図）。

P01

検出状況

II - 2 区中央部で検出した（第109図）。SD02の東側に位置する。

出土遺物

備前焼の壺（53）が出土している（図版2）。口縁部の小片で、端部を大きく巻き返し、断面稍円形の玉縁をなす。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P02

検出状況

II - 2 区西半部で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中、SD02の西側に位置する。

出土遺物

備前焼の鉢類が1点（55）出土している（図版2）。口縁部を中心に残存し、内端部が上方に大きくつまみ上げられている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。内面には7本を単位とする卸し目が残存し、体部を中心に使用痕が認められる。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P03

検出状況

II - 2 区西部で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中、P04の北東側に位置する。

出土遺物

焼壁の小片が出土している（第108図）。

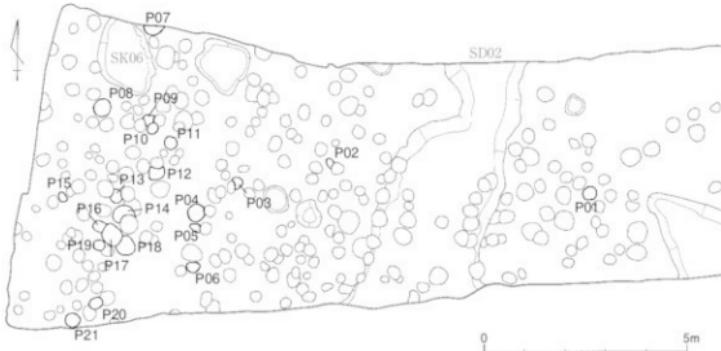
時期

遺物から時期の特定は困難である。埋土等、他

の柱穴と同じ特徴から、後半期（15世紀）に位置付けられる。



第108図 烧壁



第109図 II-2区 柱穴

P04 (モノクロ図版15)

検出状況 II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P05の北側に隣接する。
出土遺物 輪の羽口が 1 点（54）出土している（図版 2）。長さ 10.15cm の小片で、厚さ 3.55cm を測る。
時期 出土遺物から時期の特定は困難である。他の柱穴同様、後半期（15世紀）に位置付けられるものと考えられる。

P05 (モノクロ図版15)

検出状況 II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P04の南側に隣接する。
出土遺物 土師器の皿が 1 個体（56）出土している（図版 2）。完形に復元できた個体で、皿Abi に分類されるものである。
時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P06

検出状況 II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P05の南側に位置する。
出土遺物 土師器と、備前焼が出土している（図版 2）。土師器は皿の口縁部片が出土している。備前焼は、擂鉢の口縁部片（57）が出土している。わずかに残存する個体で、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。
時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P07

検出状況 II - 2 区北端部で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、SK06の北東側に位置する。全体の 1/2 が検出されている。
出土遺物 土師器の皿が 2 個体（58・59）出土している（図版 2）。いずれも皿Abi に分類されるものである。58 は内外面の磨滅が著しく、わずかに底部の切り離しがヘラによるものと確認できる程度である。59 については、内面見込みに仕上げナデが加えられている。
時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P08

検出状況 II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、SK06の南側に位置する。
出土遺物 備前焼の擂鉢（62）と壺（60）が出土している（図版 2）。いずれも口縁部を中心には残存する小片である。
62 は、内端部が上方につまみ上げられ、体部内面と口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。体部外表面は、指オサエの後横ナデ調整により仕上げられている。内面には、卸し目が残存するとともに、体部付近に使用痕が認められる。
60 は、端部を大きく巻き返し、断面梢円形をなす。内外面とも横ナデにより仕上げられている。
時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P09

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P10の北側に位置する。
出土遺物	土師器と備前焼が出土している。
土師器	皿と壺が出土している。
	皿は、63の1個体で、皿Abに分類されるものである。底部はヘラ切り後、ナデ調整が加えられている。さらに、工具痕も認められる。
	壺は、壺Aの口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
備前焼	壺の体部片が出土している。
時期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P10（モノクロ図版16）

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P09の南側に位置する。
出土遺物	瓦質土器と備前焼が出土している。
瓦質土器	壺の体部片が出土している。
備前焼	擂鉢（61）が出土している（図版2）。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、外面にはヘラナデが加えられている。口縁部は、口縁部に対して直交する端面を有する。内面には、卸し目が残存するとともに、体部内面には使用痕が認められる。
時期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P11（モノクロ図版61）

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P10の南東側に位置する。
出土遺物	土器と鉄製品が出土している。
土器	土師器と備前焼が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は皿の口縁部片が、備前焼は壺の体部片が出土している。壺の体部片は、淡赤褐色呈する。
鉄製品	不明品（M17）が出土している（図版34）。円盤状をなす鉄板の一部と考えられ、約1/4残存する。厚さは3mmである。
時期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P12

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P11の南側に位置する。
出土遺物	土師器と備前焼が出土している。
土師器	皿が1個体（65）出土している（図版2）。皿Abに分類されるものである。
備前焼	壺の体部片が出土している。須恵質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。
時期	出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。

P13

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P14の北側に位置する。
出土遺物	土師器・備前焼・瓦質土器が出土している。

土師器	皿の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
備前焼	擂鉢の口縁部片（66）が出土している（図版2）。口縁部が上方に大きく引き延ばされ、複合口縁状をなす。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。
瓦質土器	堀が出土しているが、小片のため図化できなかった。
時　　期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 14

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P 13の南側に位置する。
出土遺物	土師器皿1個体（69）と瓦質土器の堀1個体（67）が出土している（図版2）。69は皿Aaに分類されるものである。67は、体部外面がナデ調整、他が横ナデ調整により仕上げられている。
時　　期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 15

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P 13の西側に位置する。
出土遺物	瓦質土器の堀（68）が1個体出土している（図版2）。口縁部を中心に残存し、口縁端部直下外面には断面方形の鍔が貼り付けられている。鍔の幅はわずか9mmである。体部外面を横方向のハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。
時　　期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 16（カラー図版19）

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P 17に切られている。
出土遺物	土師器と青磁が出土している。
土師器	皿の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。
青　磁	碗が1個体（70）出土している（図版2）。底部を中心に残存し、高台臺付の一部を除いては釉が掛けられている。外面には、わずかに有稜の連弁文を確認することができる。
時　　期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 17（モノクロ図版16）

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P 18の北西側に位置する。
出土遺物	土師器と瓦質土器が出土している。
土師器	皿と堀が出土している。
	皿は、2個体（71・72）出土している（図版2）。71は、皿Abに分類されるもので、口縁部には煤状の付着が認められる。72は、皿Aaに分類されるものである。
	堀は、小片のため図化できなかったが、体部片が出土している。外面は叩き整形により仕上げられ、煤が付着している。
瓦質土器	堀の体部片が出土している。
時　　期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 18

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P17の南東側に位置し、P17に切られている。
出土遺物	土師器の皿が2個体（73・75）出土している（図版2）。2個体とも皿Abに分類されるもので、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。ヘラ切り後は、いずれもナデ調整が加えられている。形態的にも類似するが、法量が大きく異なる。75は口径11.7cmと、皿のなかでも大型である。
時期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 19

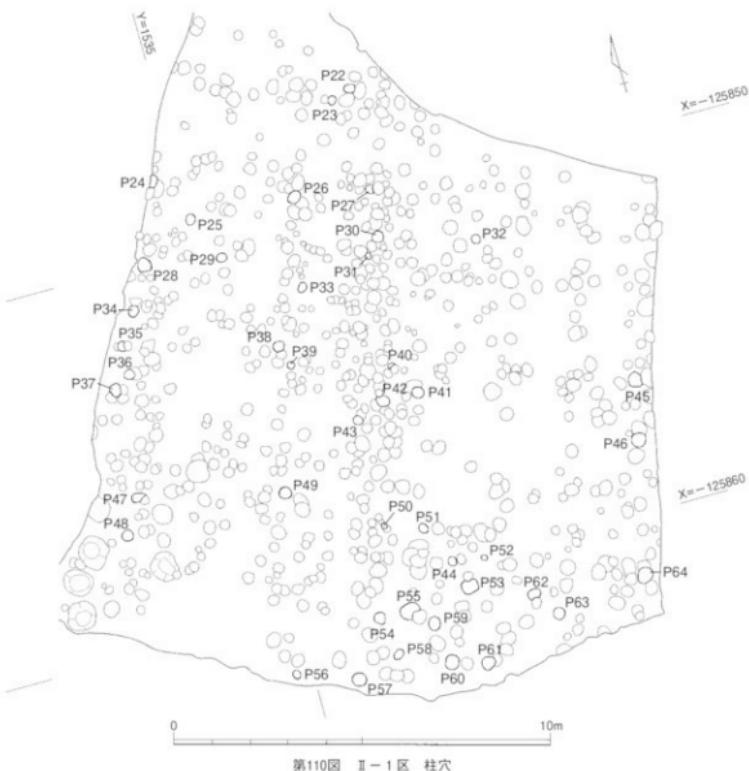
検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P17の南西側に位置する。
出土遺物	土師器と備前焼が出土している。
土師器	皿と壺が出土している（図版2）。
	皿は、74の1個体が出土している。皿Abに分類されるもので、内面見込みには仕上げナデが認められる。
	壺は、いわゆる壺Aの口縁部片（77）が出土している。体部外縁を叩き整形、内面を横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。
備前焼	壺の体部片が出土している。
時期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 20（モノクロ図版61）

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群南西隅に位置し、P21の北東側に位置する。
出土遺物	土器と鉄製品が出土している。
土器	土師器の皿の口縁片が出土しているが、小片のため同化できなかった。
鉄製品	環状をなす鉄製品（M19）が出土している（図版34）。5.55cm×4.35cmの半環状をなすが、完存しない。断面形は、8mm四方の方形をなす。
時期	出土土器から時期の特定は困難であるが、他の柱穴と同様、後半期に位置付けられる。

P 21

検出状況	II - 2 区で検出した（第109図）。II - 2 区建物群中に位置し、P20の南西側に位置する。
出土遺物	土師器と備前焼が出土している。
土師器	76の1個体が出土している（図版2）。口縁部から体部にかけて残存し、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。底部まで残存しないが、調整手法から、皿Bに分類されるものと考えられる。
備前焼	壺と壺の体部片が出土している。壺は、須恵質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。
時期	出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。



P 22

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）北部、P 23の北東側に位置する。

出土遺物

備前焼の捕鉢 1 個体 (78) が出土している（図版2）。底部を中心に残存し、体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。底部はヘラナデにより仕上げられている。内面には 8 本を単位とする卸し目が認められ、残存する範囲において使用痕が認められる。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 23

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 22の南西側に位置する。

出土遺物

壺 1 点 (79) が出土している（図版2）。備前焼に類似するが、断定はできない。底部を中心に残存し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。見込みには釉が掛けられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。底径5.4cmと小型の製品である。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P24

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）西端に位置し、約1/2検出している。
- 出土遺物 土師器と備前焼が出土している。
- 土師器 80の皿1個体が出土している（図版2）。皿A bに分類されるもので、底部はヘラ切り後ナデ調整が加えられている。内面見込みには仕上げナデが加えられている。
- 備前焼 斧の体部片が出土している。
- 時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P25

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P29の北西側に位置する。
- 出土遺物 土師器の皿が2個体（81・82）出土している（図版2）。2個体とも磨滅が著しく、内外面の調整は観察できない。形態的特徴から、皿Bに分類されるものと考えられる。
- 時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P26

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P27の北西側に位置する。
- 出土遺物 土師器の皿が1個体（83）出土している（図版2）。皿Aaに分類されるものである。糸切りについては、残存箇所がわずかであるため、回転糸切りなのか静止糸切りなのか、判断できない。
- 時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P27（モノクロ図版16）

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P26の東側に位置する。
- 出土遺物 備前焼の斧の口縁部片が1点（85）出土している（図版2）。口縁部は外外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、端部は大きく折り返されているが、口縁部までは達していない。
- 時期 出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。

P28

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P29の西側に位置する。
- 出土遺物 土師器と備前焼が出土している。
- 土師器 84の皿1個体が出土している（図版2）。皿Aaに分類されるものである。
- 備前焼 斧の体部片が出土している。
- 時期 出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。

P29

- 検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P25の南側に位置する。
- 出土遺物 土師器と瓦質土器が出土している。
- 土師器 皿の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦質土器 堀（86）が出土している（図版3）。口縁部を中心に残存し、口縁部は受口状をなす。外側は横ナデ調整により、内面は横方向のハケ調整により、仕上げられている。口縁部内面には、ハケ調整後ナデ調整が加えられている。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 30

検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 31の北東側に位置する。

出土遺物 備前焼の擂鉢が1点（90）出土している（図版3）。口縁部内端部が大きく上方に引き延ばされている。口縁部外面から内面にかけては、回転ナデ調整により仕上げられ、体部外側はナデ調整により仕上げられている。内面には11本を単位とする卸し目が引かれ、体部内面には使用痕が認められる。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 31（モノクロ図版61）

検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 30の南西側に位置する。

出土遺物 土器と鉄製品が出土している。

土器 土師器の皿の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

鉄製品 不明品（M18）が出土している（図版34）。厚さ3.5mm～4.5mmの鉄板で、コーナーを中心とした一部が残存する。各片の規模は、5.6cmと7cmである。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 32

検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 30の東側に位置する。

出土遺物 土師器の椀が1点（87）出土している（図版3）。椀Aaに分類されるものである。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 33

検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 30の南西側に位置する。

出土遺物 備前焼の擂鉢が1点（88）出土している（図版3）。口縁部内端部をわずかにつまみあげ、口縁部に対して直交する端面を有する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、内面には卸し目（9本残存）が引かれている。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 34（モノクロ図版61）

検出状況 II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 35の北側に位置する。

出土遺物 鉄釘（M11）が出土している（図版34）。頭部と先端を欠き、残存長は5.1cmである。断面は5.5mm×5 mmの方形をなす。

時期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P35

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P36の北側に位置する。

出土遺物

土師器の壙が1点（89）出土している（図版3）。いわゆる壙Aの口縁片である。体部外面を叩き整形、内面を横向方向のヘラ削り後ナデ調整を加え、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P36

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P37の北東側に位置する。

出土遺物

土師器と備前焼が出土している。

土師器

皿の口縁部片が出土している。

備前焼

擂鉢が1個体（91）出土している（図版3）。口縁部を中心に残存し、内端部が上方につまみあげられ、外端面は直立する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられているが、口縁部の仕上げは整っていない。また、内面には8本を単位とする鉗し目が引かれている。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P37

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P36の南西側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（93）出土している（図版3）。皿Abに分類されるもので、大型の皿である。底部をヘラにより切り離された後、板目状の工具痕が認められる。口縁部から体部内面は回転ナデ調整後、ナデ調整が加えられている。見込みには仕上げナデが加えられている。口縁部内面の煤状の付着から、灯明皿として使用されていた可能性が考えられる。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P38（モノクロ図版16）

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P39の北側に位置する。

出土遺物

瓦質土器の壙が1点（92）出土している（図版3）。底部を除いて完形に復元できた個体で、口縁部下外面に断面方形の鈎が貼り付けられている。鈎の幅は9.5mmである。体部内外面が横向方向のハケ調整により仕上げられた後、横ナデ調整により仕上げられている。内外面のハケは、18本/1cmと細かいものである。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P39

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P38の南側に位置する。

出土遺物

備前焼の擂鉢が1点（94）出土している（図版3）。口縁部を中心に残存し、口縁部内端部が大きくなつまみあげられ、斜交する端面を有する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられているが、体部外面はユビオサエの後に回転ナデ調整が施されている。

時期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P40 (カラー図版19・23)

検出状況	II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 42の北側に位置する。
出土遺物	白磁と青磁が出土している（図版3）。
白 磁	杯が1点(95)出土している。口縁部がわずかに残存する個体である。壓押し成形により、口縁部のラインが山形をなす。外面とも釉が掛けられ、細かい貫入が認められる。
青 磁	碗の底部片が1点(96)出土している。高台を欠くため、残存するのは底部の極一部である。内面見込み部分には印花文らしき陰刻がわずかに認められる。内面および体部外面には釉が掛けられ、高台より内側は露胎している。
時 期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P41 (モノクロ図版61)

検出状況	II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 42の東側に位置する。
出土遺物	鉄釘（M16）が出土している（図版34）。和釘の一部で、残存長は3.45cmである。断面は4mm×5mmの方形をなす。
時 期	出土遺物から時期を特定することは困難である。柱穴埋土の特徴から、他の柱穴同様、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P42

検出状況	II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 41の西側に位置する。
出土遺物	土師器の壙が1点(97)出土している（図版3）。壙Aの口縁部片である。体部外面を叩き整形、内面をナデ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。この他、97の一部と考えられる体部も出土している。
時 期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P43

検出状況	II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 42の南西側に位置する。
出土遺物	土師器と備前焼が出土している。
土師器	皿が1点(98)出土している（図版3）。皿Aに分類されるものであるが、磨減が著しく、底部の切り離しは観察できない。
備前焼	壺の肩部片が出土している。外面には波状文が施文されている。
時 期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P44

検出状況	II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 52の西側に位置する。
出土遺物	土師器の皿が1点(99)出土している（図版3）。皿Abに分類されるもので、口径11.7cmと皿の中では大型である。
時 期	出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P45

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P46の北側に位置する。

出土遺物

瓦質土器の壙が1点（100）出土している（図版3）。口縁部がわずかに残存する。内面が横方向のハケ調整、外面がユビオサエの後ナデ調整が加えられ、最後に口縁端部を中心に横ナデ調整により仕上げられている。外面の一部に煤の付着が認められる。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P46（モノクロ図版61）

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P45の南側に位置する。

出土遺物

鉄釘（M13）が出土している（図版34）。頭部先端を欠き、残存長は4.45cmである。断面は4.5mm×5mmの方形をなす。

時 期

出土遺物から時期を特定することは困難である。柱穴埋土の特徴から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P47（モノクロ図版16）

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P48の北東側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（103）出土している（図版3）。皿Abに分類されるものである。内面見込みは、最後に仕上げナデが加えられている。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P48

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P47の南西側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（104）出土している（図版3）。皿Bに分類される皿で、口縁部を中心には横ナデ調整により仕上げられている。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P49

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P43の南西側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（102）出土している（図版3）。口径18.9cmに及ぶ大型の皿である。口縁部を中心に残存し、端部は強い横ナデにより受口状をなし、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P50

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P51の北西側に位置する。

出土遺物

瓦質土器の壙が1点（101）出土している（図版3）。口縁部を中心に残存し、口縁端部付近外面に断面方形の鈎が貼り付けられている。内面は横方向のハケ調整、外面は横方向のヘラ削り後、鈎から口縁端部にかけて横ナデ調整により仕上げられている。全体的に壙

しが不十分である。

時 期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P51（カラー図版19）

検出状況 II-1区で検出した。II-1区建物群（第110図）、P50の東側に位置する。

出土遺物 土師器と青磁が出土している。

土師器 堀の体部片が出土している。外面はナデ調整、内面はハケ調整により仕上げられている。

青 磁 盆の口縁部片（105）が出土している（図版3）。口縁部の小片で、内外面とも釉がかけられている。全体的に薄く仕上げられている。

時 期 土師器堀の特徴から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P52

検出状況 II-1区で検出した。II-1区建物群（第110図）、P44の東側に位置する。

出土遺物 土師器の皿が1点（107）出土している（図版3）。皿Aに分類される皿であるが、底部の切り離しについては観察できない。

時 期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P53

検出状況 II-1区で検出した。II-1区建物群（第110図）、P44の南東側に位置する。

出土遺物 土師器の皿が1点（108）出土している（図版3）。皿Aaに分類される皿で、口径11.5cmと大型である。

時 期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P54

検出状況 II-1区で検出した。II-1区建物群（第110図）、P55の南西側に位置する。

出土遺物 土師器と瓦質土器が出土している。

土師器 皿の口縁部片が出土している。P59出土の115と同タイプに分類されるものである。

瓦質土器 堀が1点（109）出土している（図版3）。口縁部を中心に残存し、口縁部外面に断面長方形の鈎が貼り付けられている。体部外面をユビオサエとナデ調整後、体部内外面を横方向のハケ調整により仕上げ、その後口縁部内外面が鈎の貼り付けに合せて横ナデ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P55

検出状況 II-1区で検出した。II-1区建物群（第110図）、P59の北西側に位置する。

出土遺物 土師器の皿が1点（110）出土している（図版3）。皿Aaに分類される皿で、底部には工具痕が認められる。

時 期 出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 56

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 57の北西側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（111）出土している（図版3）。皿Aaに分類される皿である。磨滅のため明確ではないが、底部は静止糸切りにより切り離されている可能性が高い。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 57

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）南端、P 56の南東側に位置する。

出土遺物

土師器の皿（113）と堀（112）が出土している（図版3）。

皿は、口縁部を中心に残存し、全体的に磨滅が著しい。わずかに回転ナデ調整の痕跡が認められることから、皿Aに分類されるものと考えられる。

堀は、堀Aに分類されるもので、口縁部から体部にかけて残存する。体部外面を叩き整形後、体部内面および口縁部外が横ナデ調整により仕上げられている。この他、外面に煤が付着した同タイプの堀の体部片が出土している。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 58

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）建物群の南端、P 57の北東側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（114）出土している（図版3）。皿Abに分類される皿である。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 59

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 60の北側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（115）出土している（図版3）。皿Abに分類される皿で、回転ヘラ切り後ナデ調整が加えられている。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P 60

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P 61の西側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が2個体（116・117）出土している（図版3）。いずれも皿Abに分類される皿で、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。さらに117は、ヘラ切り後にナデ調整が加えられている。116と117は法量的に大きく異なり、117は口径12.1cmと大型である。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P61 (カラー図版15)

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P60の東側に位置する。

出土遺物

土師器と陶器が出土している。

土師器

皿の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

陶 器

古瀬戸の壺（118）が出土している（図版3）。体部から頸部にかけて残存する個体で、肩部に耳が貼り付けられている。残存するのは1箇所であるが、本来は4箇所にあったものと考えられる。耳の上側には4条の直線文が刻まれている。頸部上端部にも同様の沈線が1条認められる。頸部内面と外面全面に釉が掛けられており、貫入が認められる。体部内面は回転ナデ調整により仕上げられているが、指頭圧痕も認められる。

時 期

出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。

P62 (モノクロ図版17)

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P63の北西側に位置する。

出土遺物

常滑焼の壺の体部片（119）が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面には窓片の釉着が認められる。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P63

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P62の南東側に位置する。

出土遺物

土師器の皿が1点（120）出土している（図版3）。皿Bに分類される皿で、底部から体部を手づくね整形後、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。

時 期

出土土器から、後半期（15世紀）に位置付けられる。

P64 (モノクロ図版17・カラー図版23)

検出状況

II - 1 区で検出した。II - 1 区建物群（第110図）、P63の東側に位置する。

出土遺物

土師器・備前焼・青磁が出土している（図版4）。

土師器

122と123の2個体が出土している。2個体とも同タイプに分類されるもので、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。さらに、123の体部から底部にかけての外面にはヘラ削りが施されている。2個体とも、底部付近にヘラナデ痕が認められることから、底部はヘラにより切り離された可能性が考えられる。

皿

124と125の2個体が出土している。124の底部は回転ヘラ切りにより切り離され、その後ナデ調整が加えられている。125は皿Aaに分類される皿である。

備前焼

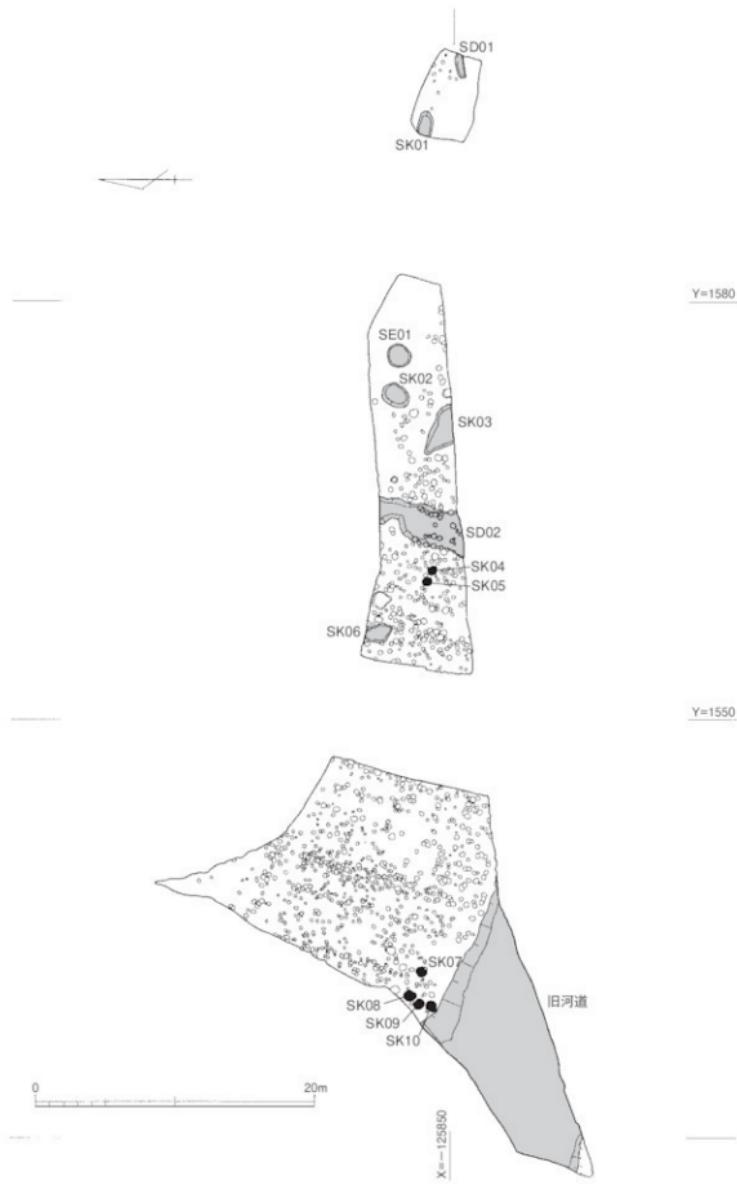
壺の体部片が出土している。須忠質をなし、外面はハケ調整により仕上げられている。

青 磁

126の皿が1点出土している。底部から体部にかけて残存する。底部はわずかに平底をなし、回転ヘラ切りにより切り離されている。内面見込みには割花文が刻まれている。底部を除いた内外面に釉が掛けられている。

時 期

出土土器から、前半期（14世紀中頃～後半）に位置付けられる。



第111図 土坑・溝・井戸

3. 井戸

1基を検出している。

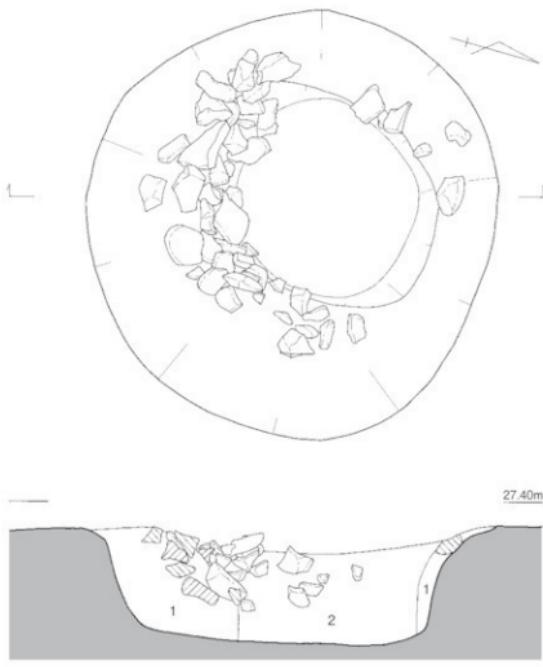
S E01 (モノクロ図版7・カラー図版16)

検出状況 II-2区東部で検出した(第111図)。石組の井戸である。SK02の東側に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模 掘り方の平面形は円形をなす。その規模は、南北方向で1.68m、東西方向で1.77mを測る。掘り方断面は箱形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは47cmを測り、その標高は26.83mである。

掘り方内には、石組の井筒が造られていたようであるが、残存状況は良好ではなく、石組の大半が崩落した状況であった。石組は、10cm~25cm大の亜角礫が使用されていた。井筒内には水溜は遺存していなかったが、井筒の底部は掘り方底部と一致するものと考えられる。

埋没状況 黒褐色シルト混じり細砂~粗砂1層が堆積していた。



第112図 S E01